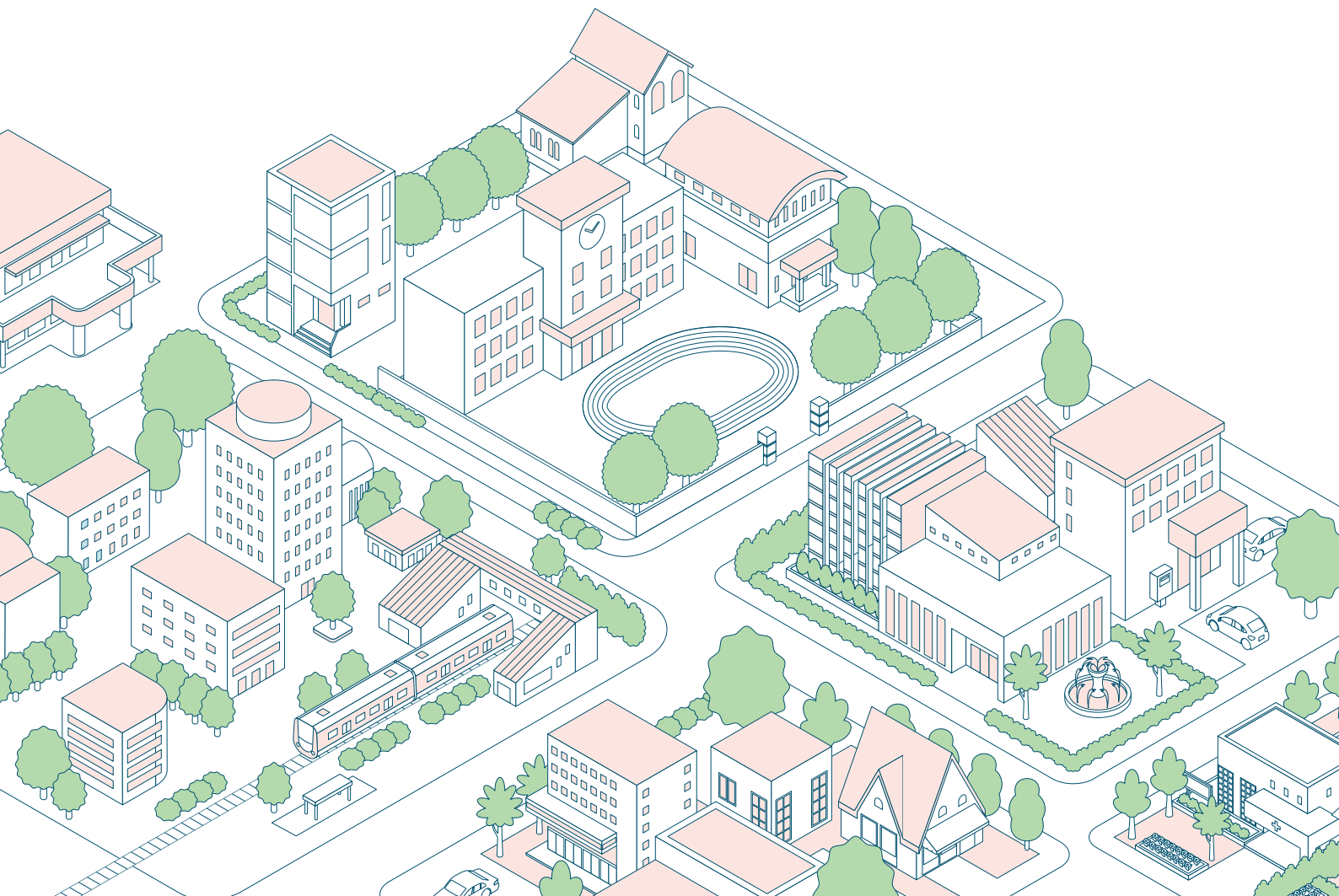


ANNUAL REPORT 2026

MITSUBISHI MEMORIAL FOUNDATION
FOR EDUCATIONAL EXCELLENCE



Contents

理事長挨拶	1
-------	---

Chapter 1 財団活動報告

2	助成事業の展開 助成カテゴリー一覧／各カテゴリーの相関
3	2026年度の助成状況
4	2026年度助成カテゴリー
6	2026年度助成先所在地マップ
8	プラットフォーム事業の推進 交流会開催
9	みらい育成アワード2025開催
10	第4回理系ブロッサム開催
11	「三菱みらい育成財団 高校生MIRAI万博」開催

Chapter 2 助成先活動報告

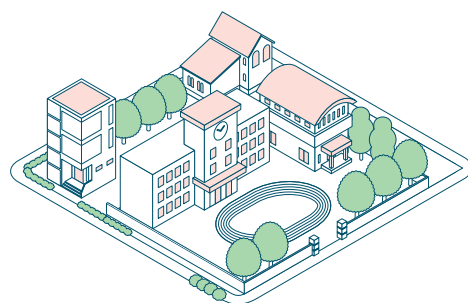
12	座談会 “出会い”が学びを変える 学校と地域を越えたつながりが、生徒と教員の可能性を開く 石井美沙子氏（一般社団法人ELAB）× 柏原奨平氏（広島市立舟入高等学校） × 中渡瀬将之氏（鹿児島県立大島高等学校）× 南澤英夫氏（青森県立大湊高等学校）
18	カテゴリー1 群馬県立高崎北高等学校
19	カテゴリー1 沖縄県立開邦高等学校
20	カテゴリー2 学校法人沖縄科学技術大学院大学学園
21	カテゴリー3 東海国立大学機構 名古屋大学 学術研究・産学官連携推進本部 イノベーション・アントレプレナーシップ推進室
22	カテゴリー4 国立大学法人筑波大学
23	カテゴリー5 桜美林大学

Chapter 3 2026年度助成先一覧

24

Chapter 4 会計報告／財団概要

36



理事長挨拶

三菱みらい育成財団は、三菱グループ創業150周年を記念して2019年10月に設立されました。VUCA[※]の時代を生き抜き、未来を切り拓く人づくりを目的に、次代を担う若者の育成を目指す教育活動への助成と、ネットワークづくりや情報発信を通じ、その成果を社会に波及させるために活動しています。

三菱グループ各社が10年間にわたり合計100億円を拠出するこの活動は、高校生を中心とする15～20歳の若者たちを対象とする我が国の教育及びそのプログラムの一層の充実の助けになればとの思いから始まりました。

2020年の助成開始から7年目となり、2026年度採択までの累計は552の高校・大学・NPO法人等にのぼり、参加者は29万人に達しています。また、多様な助成先に加え、3カ年の助成期間を終えた「アルムナイ」も含めて、意見交換や情報共有を行える定期的な交流会の場も成熟しつつあり、知恵と行動を共有するネットワークとして確かな広がりを見せています。

一方で、私たちを取り巻く社会環境は、かつてない速さと複雑さで変化しつつあります。人工知能(AI)の急速な進化や浸透により、社会・経済がどのように変化していくかを見通し難いだけでなく、世界的な合意形成が難しい地球温暖化やエネルギー・資源確保などに関する難題と共に、国際政治・経済の分断化にも私たちは直面しています。

このように、財団が設立された当時と比べて、VUCAの度合いはさらに広く深くなってきている中で、平和な社会や良き風土を支え、発展させていく礎である教育の重要性は確実に増していくと考えます。高校、大学、教育事業者等の皆さまはもちろんのこと、全ての人々がベストを尽くしてより良き教育を追求し、明るい社会を紡いでいくことが真に求められています。私たち財団も微力ではありますが、全力を尽くして参りますので、ご理解とご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

※Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字をとったアクロニム(頭字語)。一般的に、先行きが不透明で将来の予測が困難な状態を指す。

一般財団法人
三菱みらい育成財団 理事長

宮永 俊一



助成事業の展開

当財団の主軸となる取組みが「助成事業」です。次世代の人材育成を目的として、助成対象者やプログラムの参加者等に応じ、以下の5つのカテゴリーに分けて助成を実施しています（詳細は4～5ページをご参照ください）。いずれの助成カテゴリーも、1案件あたり原則として3カ年の助成を行う点が特徴となっています。

助成カテゴリー一覧

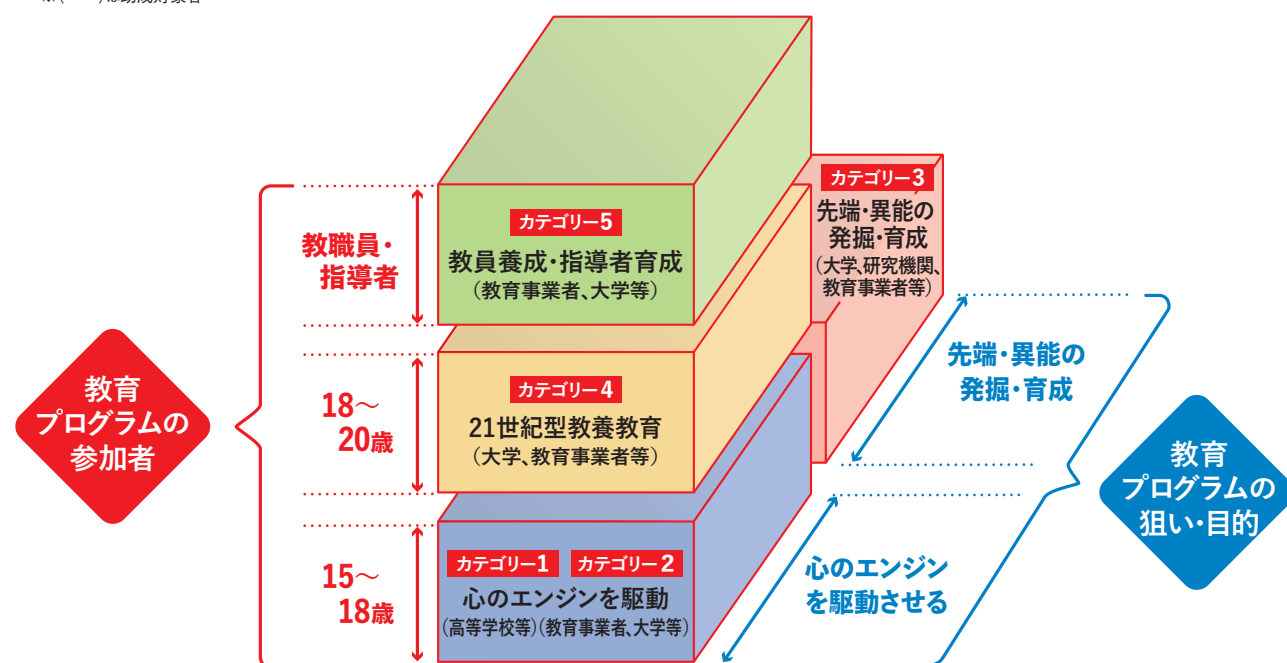
	プログラム	助成対象者	プログラム参加者
カテゴリー1	高等学校等が学校現場で実施する「心のエンジンを駆動させるプログラム」	高等学校等	高校生等(15～18歳)
カテゴリー2	教育事業者等が行う、より先進的、特徴的、効果的な「心のエンジンを駆動させるプログラム」	NPO・株式会社他 教育事業者、大学等	高校生等(15～18歳)
カテゴリー3	卓越した能力を持つ人材を、早期に発掘・育成する教育プログラム「先端・異能発掘・育成プログラム」	大学、研究機関、NPO・株式会社他 教育事業者等	高校生等(15～18歳) ^{※1}
カテゴリー4	大学・NPO等で行う、「21世紀型 教養教育プログラム」	大学、NPO・株式会社他 教育事業者等	大学1・2年生相当 (18～20歳) ^{※2}
カテゴリー5	主体的・協働的な学習(心のエンジンを駆動させる学習)を実践できる「教員養成・指導者育成プログラム」	大学、研究機関、NPO・株式会社他 教育事業者等	高校教員・指導者

※1 カテゴリー3のアントレプレナーシッププログラムの参加者は、高校生に加え、大学1・2年生も対象とします。

※2 カテゴリー4は、大学1・2年生対象のプログラムに加え、3・4年生を対象とした、専門教育と並行して実施する、学問領域横断の教養教育プログラムも対象とします。

各カテゴリーの関連

※()は助成対象者

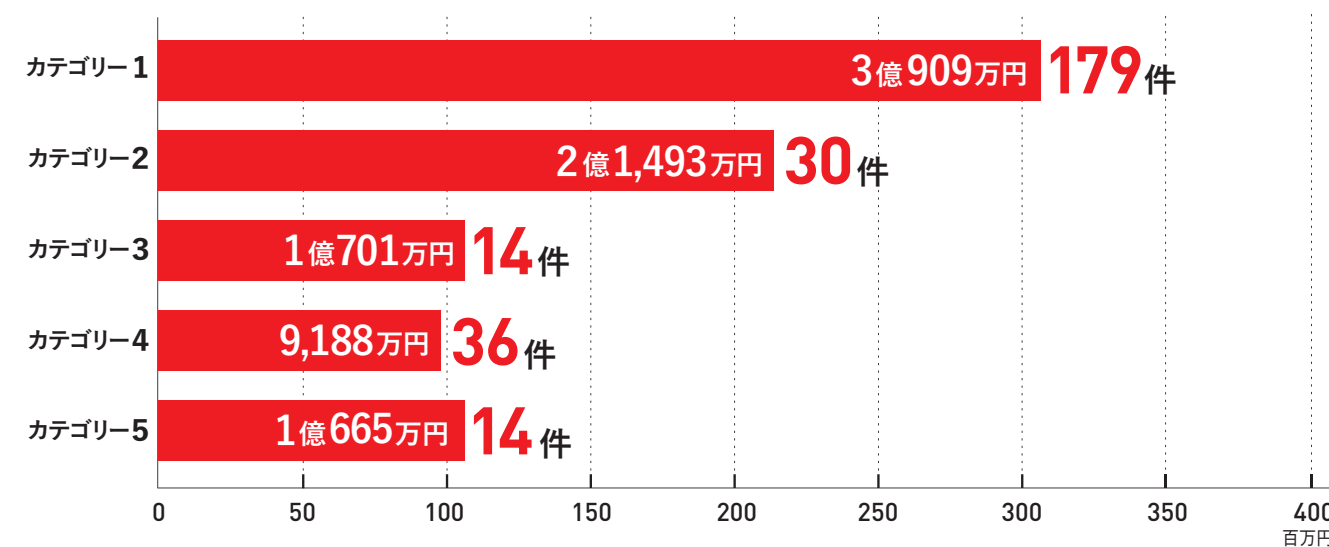


2026年度の助成状況

◆2026年度の応募・採択件数

	応募	採択
カテゴリー1	177件	58件
カテゴリー2	143件	9件
カテゴリー3	28件	4件
カテゴリー4	42件	9件
カテゴリー5	46件	4件

◆2026年度の助成件数・助成額（継続案件を含む）

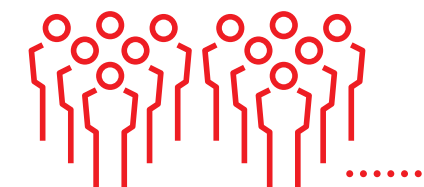


◆2026年度の カテゴリー1 助成先高校

全国 **47**
都道府県

◆2026年度の 全カテゴリーの対象者数

約 **135,800** 人



2026年度助成カテゴリー

カテゴリー 1 高等学校等が学校現場で実施する「心のエンジンを駆動させるプログラム」

■ プログラムの形態

- ・総合的な探究の時間や教科等、教育課程の一環として、原則として、学年の生徒全員を対象として行うもの
- ・内容は生徒の実態に応じて設定し、学習領域や教育手法は自由
- 期待する活動イメージ(全ての活動が含まれている必要はありません)
- ・主体的・協働的な学習(課題／研究テーマの発見から仮説設定、検証、解決・解明までの一連の流れを生徒が自主的に取り組む)プログラム
- ・多様な価値観に基づき思考や発想を出し合いながら創造的な活動や探究的な活動を行うプログラム
- ・学校外(企業、大学・研究機関、他校、地域等)との連携や、学校・地域に定着させるための体制、仕組みの整備も含まれると望ましい

■ 習得・向上を期待する資質・能力

思考力や基礎的な能力に加えて、プログラム後も生徒が継続的に心のエンジンを駆動させ、将来、社会参画・問題解決していくために必要となる資質・能力の習得・向上を期待

■ 助成対象者／プログラム参加者

高等学校等／高校生等(15～18歳)

■ 金額

年間200万円/校を上限とする。ただし、プログラム参加者が100

名以下の場合、及びプログラム対象学年が1学年のみの場合は、年間100万円/校が上限

■ 助成期間

1年間(初年度は7月から9カ月)。取組みの定着を目的に原則3カ年まで(成果報告等の内容次第では、継続助成しない場合もあり)

■ 他団体からの助成有無

他団体(自治体、各種法人等)から同一プログラムへの助成金を受けていても応募可能です。ただし、SSH、WWL、普通科改革支援事業、その他当財団の助成と趣旨が大きく重なる(と当財団が認める)文部科学省の事業等に採択され、同省から資金支援を受けているプログラムは対象外です。DXハイスクールに採択されている場合も、原則として重ねて応募できます。ただし、DXハイスクールのうち「重点類型」(200万円加算)に採択された場合は、当財団の助成を重複して受けることはできません。当財団の助成に応募し、または採択されて助成が開始された後も、今後新たに実施されるものを含め、文科省の事業等に応募することは可能です。ただし、SSH、DXハイスクール「重点類型」等、当財団の助成と趣旨が大きく重なる(と当財団が認める)文科省の事業等に採択され、同省から資金支援を受ける場合は、原則として当該年度以降、当財団の助成を重複して受けることはできません。

カテゴリー 2 教育事業者等が行う、より先進的、特徴的、効果的な「心のエンジンを駆動させるプログラム」

■ プログラムの形態

- ・学校外または学校内で一定期間、継続的に行われるプログラム(プログラム形式)、または、広く参加者を募り、成果を競い合うプログラム(コンテスト形式)
- ・学習領域や教育手法は自由(例:地域・社会課題解決学習、キャリア教育、STEAM教育、国際理解教育、食文化・農林水産、伝統文化・環境・芸術等)
- 期待する活動イメージ(全ての活動が含まれている必要はありません)
- ・主体的・協働的な学習(課題の発見から仮説設定、検証、課題解決までの一連の流れを生徒が自律的に取り組む)、創造的な活動や探究的な活動を行うプログラム
- ・学校単独では実施できない先進的または特徴的な内容(参加者間の交流や特定の属性・志向等)や手法を用いたプログラム
- ・助成終了後も継続実施するための体制や仕組みの整備(普及広報、自立化方策等)が含まれると望ましい

■ 習得・向上を期待する資質・能力

思考力や基礎的な能力に加えて、プログラム後も生徒が継続的に心のエンジンを駆動させ、将来、社会参画・問題解決していくために必要となる資質・能力の習得・向上を期待

■ 助成対象者／プログラム参加者

教育事業者(教育事業の取組み経験が1年以上あること)、大学、地方公共団体等(在外教育施設は除く)／高校生等(15～18歳)

■ 金額

年間500万～1,000万円程度

■ 助成期間

1年間(初年度は7月から9カ月)。取組みの定着を目的に原則3カ年まで(成果報告等の内容次第では、継続助成しない場合もあり)

■ 他団体からの助成有無

複数団体(自治体、各種法人等)からの同一プログラムへの助成金の有無は問いません。

カテゴリー 3 卓越した能力を持つ人材を、早期に発掘・育成する教育プログラム「先端・異能発掘・育成プログラム」

■ プログラム参加者の将来イメージ

● 先端科学の研究開発

将来、分野を問わず先端的・卓越的な基礎研究・応用研究を担う人材、パラダイムシフトにつながるような新技術や新領域の研究開発、イノベーションを担う人材

● グローバル・ビジネス

将来、グローバルな企業・組織において活躍する人材、国際的な視

点で、高い志・創造力等を備えたビジネス・リーダー人材

●アントレプレナーシップ(このプログラムのみ大学1・2年生も参加対象)

将来、既存ビジネス・市場等の構造変革につながるような革新的な事業などに携わる人材

● 地球的課題、地域・社会課題解決

将来、国際的な機関・組織・NPO・企業において活躍する人材、地球的課題(SDGs等)、地域・課題解決などに携わる人材

カテゴリー 3 (続き)

● 芸術・クリエイティブ

将来、卓越した能力を発揮して、創造的な活動により国際的に活躍する人材

※なお、プログラム自体の卓越性に加え、飛躍的な成長が期待できる参加者の効果的な発掘方法も期待します

■ 助成対象者／プログラム参加者

大学、研究機関、教育事業者等(教育事業の取組み経験が1年以上あること)／高校生等(15～18歳)、アントレプレナーシップのプログラムについては、高校生に加えて「大学1・2年生相当」も対象とする

カテゴリー 4 大学・NPO等で行う、「21世紀型 教養教育プログラム」

■ 21世紀型教養教育 領域

・人文科学領域(倫理、哲学、宗教、歴史〈現近代史を含め〉等)を中心に社会科学(法学、経済学、社会学等)、自然科学(数学、物理、生命科学等)を含め、これらの知識を融合させ「正解のない問い」について自分の頭で考えて、アウトプットするプロセスまで含むもの

・上記に加え、現代的な課題についても取り上げ、同様の手法で取り組むもの(AIと倫理、感染症対策、温暖化、エネルギー問題、ダイバーシティ・インクルージョン、サステナビリティ、SDGsの課題解決 等)

■ プログラムの形態

大学1～2年生向け^{*}に行われる教養教育において、リベラルアーツ関連領域の知識を基に、対話的手法により自己の見識を高め「モノの見方・考え方(観)」を養うもの(Critical Thinking + Writing) ※大学3・4年生を対象とするプログラムも、専門教育と並行して実施する、学問領域の横断を伴う教養教育プログラムは対象とする

■ 期待する活動イメージ(例示)

・教養教育関連領域の講義と少人数対話型形式のディスカッションを繰り返すことでの自己啓発を組み合わせたもの(大人数での講義と少人数対話型の混合プログラムも対象)

カテゴリー 5 主体的・協働的な学習(心のエンジンを駆動させる学習)を実践できる「教員養成・指導者育成プログラム」

■ プログラムの形態

大学、株式会社、NPO等の教育事業者等が行う主体的・協働的な学習を実践する指導者育成プログラムの開発及び実施。ただし、イベント等数日間の短期プログラムは除く

■ 期待する活動イメージ(例示)

- ・探究型活動に携わる高校教員・関係者を養成・育成するためのプログラムの開発
- ・探究型活動の教員養成プログラムの実施

■ 助成対象者／プログラム参加者

教育事業者(株式会社、NPO・社団・財団法人等、法人格を有する団体、教育事業の取組み経験が1年以上あること)、大学等／高

■ 金額

年間500万～2,000万円程度。ただし年間1,000万円を超える採択は、限定的に運用

■ 助成期間

1年間(初年度は7月から9カ月)。取組みの定着を目的に原則3カ年まで(成果報告等の内容次第では、継続助成しない場合もあり)

■ 他団体からの助成有無

複数団体(自治体、各種法人等)からの同一プログラムへの助成金の有無は問いません。

・大学における正式科目(講義+演習等)、複数の大学を跨ぐ活動など形式は自由(ただし、イベント等数日間の短期プログラムは除く。3カ月以上継続して行われるもの)。また、正式科目ではないパイロットプログラム等(大学外で実施する私塾のようなプログラム)も含む

■ 助成対象者／プログラム参加者

大学等(大学、学部、ゼミ単位、心ある教え手〈導き手〉がコンソーシアムを組成する、単独で実施する形でも可^{*})、教育事業者等／大学1・2年生相当(18～20歳の年齢層)、及び左記条件を満たす大学3・4年生 ※私塾(法人格は必須としない)も含む

■ 金額

年間100万～800万円程度

■ 助成期間

1年間(初年度は7月から9カ月)。取組みの定着を目的に原則3カ年まで(成果報告等の内容次第では、継続助成しない場合もあり)

■ 他団体からの助成有無

複数団体(自治体、各種法人等)からの同一プログラムへの助成金の有無は問いません。

校教員・指導者(参加者は、教員免許保有者に限定せず。高校教員を目指す人も含める)

■ 金額

年間500万～1,000万円程度

■ 助成期間

1年間(初年度は7月から9カ月)。取組みの定着を目的に原則3カ年まで(成果報告等の内容次第では、継続助成しない場合もあり)

■ 他団体からの助成有無

複数団体(自治体、各種法人等)からの同一プログラムへの助成金の有無は問いません。

カテゴリー-1
カテゴリー-2
カテゴリー-3
カテゴリー-4
カテゴリー-5



プラットフォーム事業の推進

当財団では、助成事業と並行して、助成先の皆さまに交流の場を提供する「プラットフォーム事業」の取り組みにも注力しています。助成先同士が情報交換し、ネットワーク化することで、互いに気づきや学びの機会となり、グッドプラクティスが横展開されることを目的としています。3年間の助成期間を終えた「アルムナイ」にも助成先同様、プラットフォーム事業に参加していただいています。

■ 交流会開催

助成先・アルムナイの皆さまを対象とした交流会は、全国の教職員など、教育に携わる皆さまが越境して自由につながり、創発的に学び合うとともに、新しいトライやコラボレーションを生み出す場として、財団では年4回、対面・オンラインで開催しています。

オンライン交流会は2025年11月と2026年4月に実施。前半は助成先・アルムナイのゲストをお迎えしてのオープンダイアログ、後半は4～5人のグループに分かれてのディスカッションという形式で

実施しています。参加人数制限なし、また職場からも気軽に参加いただける時間帯ということもあり、多くの方に参加いただきました。

対面での交流会は、身近な助成先・アルムナイ同士での交流を深めてもらうための地域別交流会を8月23日に仙台・大阪・岡山で、翌週の30日に東京・名古屋・鹿児島で実施。2026年2月には東京で開催し、全国各地から集まっていたいただいた皆さまに、カテゴリーや地域、肩書を越えて交流していただきました。

地域別交流会		秋のオンライン交流会		交流会（東京）		春のオンライン交流会		
日時	2025年 8月23日(土) 13:30～19:30	2025年 8月30日(土) 13:30～19:30	2025年 11月12日(水) 16:00～18:00	2025年 11月21日(金) 16:00～18:00	2026年 2月7日(土) 13:30～19:30	2026年 2月14日(土) 13:30～19:30	2026年 4月16日(木) 16:00～18:00	2026年 4月24日(金) 16:00～18:00
参加者	計84名	計100名	50名	70名	48名	47名	53名	62名
備考	仙台36名、 大阪28名、 岡山20名	東京51名、 名古屋19名、 鹿児島30名	オープン ダイアログ ゲスト 愛知県立犬山 総合高等学校 (カテゴリー1)	オープン ダイアログ ゲスト 鹿児島県立 大島高等学校 (カテゴリー1)			オープンダイアログゲスト 認定NPO法人 全国こども食堂 支援センター・ むすびえ (カテゴリー2)	オープンダイアログゲスト 国立大学法人 東京科学大学 リベラルアーツ 研究教育院 (カテゴリー4)
	開催レポートは こちら 		開催レポートは こちら 		開催レポートは こちら 		開催レポートは こちら 	



大阪会場での様子。「心のエンジン」を育むために大切なことについて3つのキーワードを出していただきました。



鹿児島会場には30名の方が参加。グループディスカッションで話したことの発表に深くうなずく参加者も。



2026年2月に東京で行われた対面交流会。最後には大きな輪になって、感想や気づきなどを共有していただきました。



2025年度アワードの受賞者の皆さま

■ みらい育成アワード2025開催

2025年9月20日、JPタワーホール(東京都千代田区)にて「みらい育成アワード2025～知見、実践、その想いを分かち合う～」が開催されました。本アワードは、前年度採択で2年目にあたる助成先の中から優れた活動・成果を表彰するとともに、培われた知見やノウハウ、想いを参加者間で分かち合うことを目的としています。

授賞式では、10団体の皆さまに記念品と目録を贈呈。その後、グランプリ受賞団体による取り組み事例のプレゼンテーションが行われ、グループディスカッションや全体での質疑応答を通じて活発な意見交換が展開されました。続いて「探究的な学びの充実に向けて～つながる・深める・拡げる～」をテーマに、パネルディスカッションを実施しました。

最後の振り返りワークショップでは、探究学習における生成AIの活用や教員の働き方改革など、教育現場が直面する課題についても具体的な実践例が

共有されました。閉会後は懇親会を開催し、参加者同士の交流をさらに深めていただきました。

参加者からは、「今日出会った学校との交流も決まるなど、今後の進展が楽しみ」「高大連携の中で子どもたちが探究学習を通して成長できる環境をつくっていければ」といった声が寄せられ、学校・大学・民間企業の垣根を越えた学びとつながりの場となりました。

受賞結果

グランプリ

カテゴリー1(東地区)
群馬県立伊勢崎高等学校
カテゴリー1(西地区)
京都市立京都妻和高等学校
カテゴリー2
株式会社 トモノカイ
カテゴリー3
国立大学法人 東京科学大学
カテゴリー4
国立大学法人 山梨大学

準グランプリ

カテゴリー1(東地区)
金沢大学人間社会学域
学校教育学類附属高等学校
カテゴリー1(西地区)
島根県立益田高等学校
カテゴリー2
一般社団法人
Girls Unlimited Program
カテゴリー4
公立大学法人 埼玉県立大学

※ 対象団体が5～9団体のカテゴリーはグランプリのみ授与。対象団体が4団体以下のカテゴリーは「三菱みらい育成財団賞」を授与

三菱みらい育成財団賞

カテゴリー5
認定特定非営利活動法人 カタリバ



宮永理事長が開会の挨拶を行い、教育の重要性と本アワードの意義について語りました。



グランプリ受賞団体の皆さまには取り組みについてプレゼンテーションを行っていただきました。



パネルディスカッションでは、(左から)モデレーターとして、京都大学総合博物館 塩瀬隆之氏がパネリストとして大阪府立淀商業高等学校 秋月麻衣氏、特定非営利活動法人しずおか共育ネット 井上美千子氏、北海道札幌西高等学校 相馬利幸氏、兵庫県立御影高等学校 橋本淳史氏が登壇。

▶みらい育成アワード2025の
開催レポートは[こちら](#)



第4回理系ブロッサム開催

2025年7月12日、理系進学を志す女子高校生を対象としたオンラインセミナー「第4回理系ブロッサム」が開催され、全国から約90人が参加しました。セミナーは2部構成で行われました。第1部では、東京大学の横山広美教授と教育系YouTuberの葉一さんによるトークセッションが展開されました。横山さんは物理学で博士号を取得後、専門を科学技術社会論に変更するなどの経歴を持ち、理系を志す女性が少ない問題も研究テーマとしています。セッションの中では「女子は理数が苦手というジェンダー・ステレオタイプが理系女子を阻む一因」と指摘。葉一さんは「性別カテゴライズのないフラットな世界になればいい」と応じ、インクルーシブな社会の実現を共に訴えました。

高校生からの質疑では「自分の選択にいつ確信が持てるか」「宇宙が好きだが将来は会計士になりたい」など切実な悩みが寄せられ、お二人からは「3カ月後かもしれないし5年後かもしれないが、その間にもパズルのピースを少しずつ拾っていて、いつかきれいな絵が見えたときに確信めいたものが生まれるはず」「進路選択にはいろんな考え方があっていい」という丁寧な回答がありました。最後には「身近な世界に学びとのつながりを見つけることで楽しみが広がるはず」(横山さん)、「ネットの情報に振り回されずオープンキャンパスなどで自分の目で確かめることが大切」(葉一さん)とのメッセージが送られました。

第2部では、三菱グループの理系出身若手女性社員と理系大学・大学院生ファシリテーター各28人



東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構・学際情報学府の横山広美教授(右)と、教育系YouTuberのバイオニアである葉一さん(左)のトークセッションの様子

が参加し、Zoomのブレイクアウトルームで少人数のグループディスカッションが行われました。「苦手科目の克服法」「学科の選び方」「部活と受験の両立」など多岐にわたる相談に対し、社員からは「学んだことは無駄にならず選択の切り口になる」、ファシリテーターからは「理系を選択した先にもさまざまなゴールがあり、興味・関心を軸に理系選択を試みるのも一つでは」など、経験に基づくアドバイスが伝えられました。

参加者からは「進む道はいつでも変えられると分かって安心した」といった声が上がリ、3時間のセミナーは進路への不安を和らげ、未来を前向きに考えるきっかけとなりました。

協力企業:AGC、キリンホールディングス、東京海上日動火災保険、ニコン、三菱化工機、三菱ガス化学、三菱重工業、三菱商事、三菱地所設計、三菱製鋼、三菱倉庫、三菱総合研究所、三菱マテリアル、三菱UFJ銀行、三菱UFJ信託銀行、明治安田生命保険 (順不同)

▶第4回 理系ブロッサム開催レポートはこちら



参加者の感想

- ▶横山先生のお話はとても分かりやすく、私も将来こんな女性になりたいと思いました。大学で学んだことと全く違う分野でも、学んだロジックは活かせるというお話が印象に残りました。
- ▶実際に働いている方のお話を聞いて、仕事に就くまでの道のりは本当に人それぞれなんだと思いました。そして、決められた型はないので、自分なりに新しい方法を考えてみようと思いました。
- ▶どんなイベントか想像がつかず不安だったのですが、気軽に質問や思いを言い合うことができて、とても有意義な時間になりました。また私と同じよう

- な悩みを持っている仲間が全国にいたことが分かって安心したし、とても刺激になりました。
- ▶学校だけでは得られないたくさんの情報を得られました。クラスメートともシェアしてみようと思います。
- ▶必ずしも大学で専門的に学んだことを仕事にするわけでもなく、大学で学んだことはいろいろな分野で活かすことができると聞き、とてもワクワクしました。
- ▶トークセッションの後に、他のグループのメンバーと感想や意見を共有する場があったのが良かったです。考えを整理でき、他の人がどのような話を聞いたのか分かりました。

「三菱みらい育成財団 高校生MIRAI万博」開催

2025年7月31日、大阪・関西万博にて「三菱みらい育成財団 高校生MIRAI万博」が開催されました。

第1部「高校生たちの成果発表」では、全国74校・364チームの応募から選ばれた最優秀賞6チームがEXPOホール「シャインハット」で、優秀賞14チームがウーマンズパビリオン「WA」スペースで探究活動の成果を発表。食のバリアフリー、平和教育、防災ゲーム、商品開発など、地域や社会課題に根ざした多彩なテーマについての発表が披露されました。

第2部「高校生による世界への発信」では、全国から選ばれた60名が5人1組12チームを結成。2024年夏から3回の合宿を経て練り上げたテーマをもとに、代表3チームが「シャインハット」にて、「年齢による偏見」「異文化共生」「出会いと対話」について発信しました。

当日は高校生、来場者、またご招待した地元のインターナショナルスクールの生徒など、関係者約1,900人が参加。探究活動や合宿を重ねて準備してきた157人の生徒たちの熱意ある発表に、盛大な拍手が寄せられました。

▶「三菱みらい育成財団 高校生MIRAI万博」開催レポートはこちら



フィナーレでは第1部・第2部の高校生157人が舞台上がって、会場の聴衆に笑顔で手を振りました。



当日は参加者の皆さまを、三菱グループが出展したパビリオン「三菱未来館」にご招待。万博自体も楽しんでいただきました。

VOICE 第2部参加者の声

2026年3月末に、第2部参加者を対象にリフレクション(振り返り)を開催しました。その中で出た感想を紹介します。

Q「高校生MIRAI万博」を経験したことによる自らの変化について教えてください。

- 参加する前は何かをするにもあきらめが早く、「どうせ無理」と決めつけていたが、きちんと自分を見てくれる環境で、自分は変わった。
- 高校生の活動に限界はなく、思ってもみなかったところまで到達できることを知り、挑戦し、取り組むことの大切さや、すぐに行動を起こす勇気を学ぶことができた。
- 互いに意見を強く持ったからこそチーム内で対立も生じたが、乗り越えて新しい意見が生まれた。
- 「高校生はこれくらいでしょ」と決めつけなくなり、可能性の幅が広がった。万博のような大きな活動でなく、一つ一つの経験に対して意味を持たせるようになった。
- 大胆な選択肢を選ぶ勇氣を持てるようになり、「なんとかなる」マインドを手に入れた。
- ゼロから何かを生み出す楽しさ、難しさを知った。異なる環境にいる人とコミュニケーションし、協働する力を学んだ。
- リーダーシップが身についた。「誰かを支える役」と自分自身を捉えていたが、話を回す役や意見をまとめる機会を万博の間に何度も担い、支えるだけでなく自らが軸となる力もついたように感じた。
- 大きな舞台に立たせてもらったことで度胸がついた。他人と関わりながら活動することでアイデアがあふれ、プロの大人との関わりで活動の幅が広がるという気づきがあった。自分の個性は光らせるためにある。正解も不正解も存在しない。



本番前日に、「シャインハット」にてリハーサルに臨む、第2部の高校生たち

座談会 “出会い”が学びを変える

学校と地域を越えた
つながりが、生徒と教員の
可能性を開く

2020年度からスタートした三菱みらい育成財団の助成事業は7年目を迎えています。財団が助成とともに注力してきたのが、助成先同士のネットワークの場づくりです。助成先やアルムナイの皆さまからは、交流会やアワードを通じて、学校の中だけでは得られなかった視点や実践のヒントを得ることができたといった声を多数寄せていただいています。今回は、地域性も活動テーマも異なる4つの現場の実践者の方々にお集まりいただき、学校の枠を超えたつながりが生徒や教員にもたらす変化、そして財団のネットワークから得た学びについて語っていただきました。(以下、敬称略)

妹背 まずは自己紹介を兼ねて、皆さんが取り組まれている活動について教えてください。

中渡瀬 (鹿児島県立大島高校) 本校では、この6年間、奄美群島全体を巻き込んだ探究の仕組みづくりを進めてきました。奄美群島には高校が9校ありますが、大学がないため、探究を支えてくれる人材が少ないという課題がありました。そこで奄美群島全体の高校でスクラムを組み、県内外の大学、自治体、企業、研究者とつながるコンソーシアムをつくって、地域振興と人材育成を同時に進める体制を築いてきました。今は、築いてきたネットワークを土台に、高校生が地域行政の現場や最前線で活躍する人たちと出会い、地域づくりの当事者として関わるフィールドワークにも取り組んでいます。

石井 (一般社団法人ELAB) アーティスト谷澤邦彦が立ち上げた当法人は、アートの創作や鑑賞を通して、自己理解、他者理解、主体性、多様性受容といった、探究の土台になる力を育むメソッド「EGAKU」を展開しています。パステルを使って、大切にしている価値観や未来への思い、感情などを指で描き、その後、作者の意図を伏せたまま対話し、最後に自分

の思いを言葉にしていく。そのようなプロセスを通して、自分の内面に向き合い、他者の感性に触れる場をつくっています。財団の助成カテゴリ2の高校生向けプログラムだけでなく、カテゴリ5の教員向け研修にも力を入れており、先生たち自身が“正解のない学び”を体感することで、探究の推進や学校全体のチームビルディングにつなげる取組みも進めてきました。

柏原 (広島市立舟入高校) 本校では、「平和」「国際」「探究」の3つを学校の柱にしています。広島という土地柄、平和学習は学校の重要な使命ですが、本校は被爆による犠牲者数が非常に多い学校でもあり、その歴史を受け継ぎながら、世界に向けて被爆の実相をどう伝え、平和を構築していくかを考えてきました。助成を受けた当初は「探究」という言葉自体がまだ浸透しておらず、まず学校全体に探究的な学びを根づかせることに力を注ぎ、その後はつながりを生かした実践を広げてきました。財団の助成先でもある長崎県立長崎東高校との姉妹校提携や合同探究、国連本部への派遣、模擬国連の実施などを通して、広島・長崎だからこそできる学びを模索しています。



柏原奨平氏
広島市立舟入高等学校
カテゴリ1

石井美沙子氏
一般社団法人ELAB
カテゴリ2-5

中渡瀬将之氏
鹿児島県立大島高等学校
カテゴリ1

南澤英夫氏
青森県立大湊高等学校
カテゴリ1

妹背正雄
ファシリテーター
三菱みらい育成財団 常務理事

南澤 (青森県立大湊高校) 本州最北端の下北半島にある本校では、下北地域の5つの県立学校で「下北BOUSAIネットワーク」をつくり、防災を軸にした実践を進めています。災害は学校を選んで来るわけではありません。ですから一校だけが頑張っても地域は守れない。そう考えて、普通高校、工業高校、定時制高校、特別支援学校まで含めた連携を進めてきました。今の高校生にとって東日本大震災は“教科書で学ぶ遠い歴史”になってしまっています。そこで、被災地訪問や講演会を通してまずは自分事にする、そのうえで、避難所体験や原子力災害を想定した学習、教室避難訓練、垂直避難訓練など、新しい防災教育を生徒と一緒にすることを大切にしています。戦争の問題もまた、人が引き起こす災害の一つとして位置づけています。

越境する学びが、
学校の「当たり前」を揺さぶる

妹背 皆さんはそれぞれ、学校の外とつながる実践をされてきたと思います。そうした交流によって、生徒や先生方にはどのような学びや変化が生まれているのか、教えていただけますか。

柏原 長崎東高校と平和学習に取り組んだ際、同じ被爆地であっても、さまざまな違いがあることが分かって生徒も教員も驚いたことがありました。長崎ではGHQの方針もあり遺構があまり残っていない一方、広島には多くの遺構があります。爆心地周辺の地理的条件も違えば、遺構の残り方も違う。原爆投下日に合わせて、生徒がお互いの現地を訪ね、1週間過ごすという取組みの中で、こうした違いに気が付きました。



石井美沙子氏
一般社団法人 ELAB

交わらないと見えてこないことがあり、その発見を発点に何を自分たちはしなければならないのかという思いが生徒たちに芽生えたのではないかと思います。

南澤 防災でも同じですね。東日本大震災は、私たち大人にとってはリアルな経験ですが、今の高校生にとっては、すでに教科書で学ぶ出来事になりつつあります。だから、被災地に何度も足を運び、被災した方の声を聞くことで、自分事にしていく必要があります。さらに、過疎化と高齢化が進む地域では、災害時に高校生や中学生が果たす役割は非常に大きい。だからこそ、地域の外ともつながりながら、自分たちの実践を他地域とも共有し、同じ課題を持つ学校と知恵を持ち寄りたいと思っています。生徒も、自分たちの活動が日本中の誰かのヒントになるんだ、という思いが強くなってきています。

中渡瀬 奄美群島内や県外の高校が集まって、「高校生サミット in 奄美」という課題研究発表会を実施しているのですが、そこでの交流は高校生たちにとって大きな刺激になっています。一口に「奄美」といっても、南北に長い群島では島ごとに文化も自然も地理条件も違います。群島の仲間同士で話すだけでも「同じだと思っていたのに、全然違う」と気づく。そこに県外の生徒の視点が入ると、さらに自分たちの地域を見つめる角度が変わるんです。**近い相手とつながっても、遠い相手とつながっても、「自分の当たり前が当たり前ではない」と知ることが、生徒の視**

座を高めていく。教員にとっても、その変化を間近で見ることで、交流の価値を実感しています。

石井 私たちも自治体や大学、地域の教育団体など多様な関係者と協働しながら、学校の枠を超えた活動を行っています。例えば複数の学校から生徒が集まる時や、地域の方々や他校の先生といった普段交流のない大人と一緒に EGAKU に取り組む時は、学校での授業とはまた違う刺激を生徒たちが吸収してくれているという実感があります。**全然知らない相手とでも対話できる、自分の言葉で思いを伝えられるということ**を一度経験すると、**もっといろいろな人と話してみたい、もっと外とつながってみたいというエネルギーが生まれている**のを感じます。大人にとっても同じように高校生から活力をもらえるという感想を多く聞きます。学校を越えた交流は、関わる全員に作用する学びだという実感はあるのですが、その一方で、今の皆さんのお話を聞いて思ったことは、こうした多方面の活動をどのように維持されているのかということでした。ただでさえ先生方はお忙しいと思うのに、何か工夫されていることはあるんでしょうか。

南澤 それは私も聞きたい点ですね。よく探究活動を回すのに孤軍奮闘していた先生が異動になると活動自体もなくなってしまうという話も聞きます。どうやったら持続可能な形にできるのか……。

中渡瀬 本校では、校長が明確なビジョンを描き、それに基づいて各部署に役割を割り振ったことで、負担が軽減され、推進できる体制が確立できたと思います。事務長をはじめ事務職員の協力も大きく、県庁や自治体との関係づくりも学校全体で進めてきました。学外の面では、地元企業からの協賛や奄美群島 12 市町村からの支援を受けられるようになったことが、活動の継続面では大きな要素だったと思います。**高校生の成果を冊子やプロモーションビデオにまとめて発信するなどの努力を積み重ねてきたことも功を奏した**と考えています。最初は苦労しましたが、今では企業や自治体から「今年もやるんですね」と声をかけていただけるようになりました。一方的な支援ではなく、大学や自治体にとってのメリットも提示しながら、互惠関係を志向していくことが肝になると考えています。

柏原 長崎東高校との連携については、2024 年度に

姉妹校提携のための調印を両校の校長の下で交わしました。公立高校同士の提携は珍しいと思うのですが、窓口や担当の教員が代わっても関係性を続けられるようにするための重要な枠組みだと考えています。また今年度から卒業生による自治的な団体づくりに取り組んでいます。在校時に探究活動の中心となっていた**卒業生が探究団体を立ち上げ、クラウドファンディングで現役高校生たちの遠征費用を集めるという仕組み**です。うまく自走できるかはまだわかりませんが、一つのチャレンジとしてスタートしています。

南澤 今の話で、大島高校さんがしっかりとゴールを定めてそれに向かって戦略的に取り組んでいる点に感銘を受けました。学校全体でネットワークを推進していく体制をしっかりとつくっていく点はぜひ本校でも取り入れたいと感じました。また舟入高校さんの卒業生のネットワークも実は本校でも取り組みたいと思っていたことです。大学進学後も防災に取り組みたいという卒業生が出てきたので、そうした大学生たちとつながれる枠組みはないかと考えていたところでした。また防災のイベントを行いたいという構想もあったので、本校の生徒たちにもクラウドファンディングについて投げかけてみたいですね。

出会いの場から 突破口やヒントが生まれる

妹背 今まさにこの場でも取組みのヒントが生まれていますが、助成先の皆さまが互いに学び合える場として財団では年に 4 回、オンラインや対面での交流会を実施しています。また、毎年 9 月に、前年度採択で 2 年目にあたる全助成先から各お一人、東京にお集まりいただき、知見やノウハウを共有する「みらい育成アワード」を開催しています。皆さん自身がこうした場にご参加いただいて得られた気づきや、実際の活動に反映したことがあれば教えてください。

中渡瀬 交流会の価値は、教員だけでなく、**学校外の立場の方と同じ目的で語り合えることにあります**。学校の先生だけが集まる場だと、成功事例を聞いて終わることも少なくありません。でも、財団の交流会では、教員も NPO 法人など事業者の方々も、同じ「子どもたちを成長させたい」という思いで集まっていて、しかも心理的安全性が高い。悩みや愚痴も出しやすいし、そこに異なる視点が入ることで、「そん

な方法があるのか」と発想が開けるんです。学校はどうしても内向きになりがちですが、その殻を破るブレイクスルーの場として、非常に貴重だと感じています。

南澤 そうですね。交流会に行くと、「自分たちは突破できない」と思い込んでいただけだったと気づかされることが多々ありますね。**誰かの話を聞くと、「そういうやり方があるのか」「それなら自分たちにもできるかもしれない」と思えるようになります**。特に地域別の交流会は、地域で抱える課題も似ていて、より実践的なヒントが多いですね。例えば東北なら震災、防災、人口減少といったテーマが共有されやすい。似た悩みを持つ人が頑張っていると分かるだけでも、元気をもらえます。

石井 私たちのような教育団体にとっても、交流会は非常に学び多い場です。**交流会では、肩書を伏せて自己紹介したり、最初から正解を示さない設計がされていたりして、まっさらな人と人として対話できる**。その中で、「こういう取組みに興味がある」「校内の先生方の巻き込みに課題がある」といった本音をお互いに共有できるんですね。私たちの場合は、そこから高校 6 校、大学 2 校、NPO・事業者 2 団体との協業につながるという成果が生まれました。

柏原 私は初期の頃は交流会に参加させていただいていたのですが、今は若手にその機会を譲るようにしています。というのも、自分が交流会に参加してみて、広島だけを見ていた視野が、日本全体へ広がっ

※1 全国 6 地域に分かれて対面で開催される交流会



柏原奨平氏
広島市立舟入高等学校

たという実感を強く得られたからなんです。全国の実践を知ること、広島にいる自分たちが何をするべきかを逆算して考えられるようになりました。例えば卒業生のつながりの枠組みも実は、大島高校さんのコンソーシアムの事例がヒントになっています。広島市の中で同じ取組みをするのは難しいけど、平和学習に関して協力してくれる方は必ずいるはずだということから着想を得ることができました。そうした学びや気づきを若手にもぜひ感じてほしいと思って、交流会への参加を促しています。その他にも財団のWebサイトで掲載されている活動レポートや成果発表動画から、防災教育に取り組んでいる全国の学校の情報を得て、修学旅行先を切り替えることもしています。財団のネットワークは、ただ情報を集める場ではなく、自校の実践を組み替えるためのヒントを得る場になっています。

南澤 私も成果発表動画はよく参考にさせてもらっていますが、膨大な量なので探すのが大変で……。

妹背 そうしたお声を踏まえて、今夏からWebサイト上でキーワード検索を可能にします。^{※2}ぜひ探究活動のヒントや視察先の検討などにご活用ください。

互いの実践に触れて見えた、新しい可能性

妹背 今回お集まりいただいた皆さんは互いにほぼ初対面に近いと思いますが、今日のこの出会いから得られた学びや気づきがあれば、お聞かせください。



中渡瀬将之氏
鹿児島県立大島高等学校

中渡瀬 特に印象に残ったのは、舟入高校さんの卒業生による自発的な団体やクラウドファンディングのお話です。本校の取組みから発案されたということにも驚きました。奄美では、大学生の年代のロールモデルに出会う機会がほとんどないという課題があります。だからこそ、卒業した先輩たちが戻ってきて、今の後輩たちを支える仕組みはとても面白い取組みになるだろうと聞いていてワクワクしました。

南澤 今日は学びがたくさんありました。私たちはもともと、できることを、できるときに、無理なく楽しくやるという、ゆるやかなネットワークでやってきましたが、長く続けたり、卒業生も含めて関わりを広げたりしていくには、やはり持続可能な仕組みが必要だと改めて感じました。本校は来年むつ市内にある工業高校と統合します。統合校でも防災を探究活動の一つにしていく構想があります。その中でどう運営体制をつくるのか、どう関係人口を増やすのか、今日のお話からたくさんのヒントをもらいました。

柏原 私は、県外とのコンソーシアムだけでなく、もっと広島県や広島市全体に目を向けなければならぬと感じました。地域の課題と言えば、本校ではやはり「平和」というテーマになりますが、それを学校全体、地域の学校全体でどういうことができるのかをもっと深掘りしていかなければならないと改めて感じました。また今年度から進路指導にも携わるようになったのですが、進学校にこそ芸術や家庭科、体育のような、自由に発想し、何かを生み出す学びが重要だという思いを持っていたので、ELABさんのお話はとても勉強になりました。

石井 私は先生方の実践に感銘を受けました。離島で地域振興に向き合うこと、平和を世界の課題として伝えること、防災を人づくりとして考えること。どれも、学校の授業という枠を超えて、社会全体を動かす活動だと感じました。先生方はもはや教育者であると同時に、地域や社会を動かすキーパーソンでもあるのだと思います。こうした方々が全国にいて、そしてそれを支えるネットワークがあること自体を、もっと社会に伝えていく必要があると感じました。

最初の一歩が、学校の未来を変えていく

妹背 これから財団の助成に応募しようとしている学

校や団体の皆さまにメッセージをお願いできますか。

中渡瀬 助成を受けることで、やりたかったことを実現しやすくなるのはもちろんですが、それ以上に大きいのは、人とつながることで、自分が思っていた以上のところまで実践が広がっていくことです。私たちも、最初は発表会を立ち上げることから始めましたが、気づけばコンソーシアムづくりまで発展していました。応募した時点では想像していなかった場所まで、実践の積み重ねが連れていってくれる。それが、こうした助成やネットワークの面白さだと思います。

柏原 最初は一人の先生から始まることが多いと思いますし、しんどい時期もあると思います。でも、その姿を見てまず生徒が変わり、生徒の変化を見て教員が変わっていく。そういう順番で学校は動いていくと、視察先の先生に言われたことがあります。まさにその通りだと感じています。どの地域にも、その場所にしかない歴史や文化、課題があります。何もない地域なんてありません。大事なものは、そこにあるものを見つめ直し、学びにつなげていくことです。地域や学校への愛、生徒への想いがあれば、探究活動は回るようになると思っています。ぜひ一緒に日本の教育をよくしていければと思います。

南澤 一歩踏み出さなければ、何も変わりません。柏原先生がおっしゃるように、最初は大変でも、やってみると生徒が変わり、教員が変わり、やがて学校全体が変わっていきます。探究は「総合的な探究の時間」だけを改善するものではなく、教科や進路、学校文化そのものにも波及してきます。続けていくことで、それは学校のプライドになり、文化になり、伝統になっていくはずだと感じています。



南澤英夫氏
青森県立大湊高等学校

石井 助成応募に関して最初のハードルの一つは申請書を書くことかもしれません。でも、そのプロセス自体が、「自分たちは何をしたいのか」「どんな未来をつくりたいのか」を言葉にする貴重な機会になります。実際、「申請の最初の段階でみんなを巻き込めばよかった」と後悔している先生もいました。申請書を単なる手続きで終わらせず、想いを同僚や生徒、仲間と共有する入り口にできると、その後の実践を支える土台になるのではないのでしょうか。

妹背 今日の座談会では、地域もテーマも異なる実践が、出会いによってつながり、新しい学びへと広がっていく様子を実感することができました。ありがとうございました。

2026年6月28日 東京・丸の内にて



2024年度
カテゴリー

1 群馬県立高崎北高等学校

“未来を拓く”あらかぎ探究 ～問いを磨き、生徒も教師も学び続ける学校～

問いを起点に、 社会とつながる5つの柱

高崎北高校では、同校のシンボルツリー「あらかぎ」の名を冠した「あらかぎ探究推進部(以下、推進部)」のもと、「問いを磨く」「探究型インターンシップ」「学生アドバイザー」「あらかぎフィールドワーク(FW)」 「あらかぎ卒業生調査」という5つの柱で探究活動を展開している。

「問いを磨く」では、「自分自身の興味関心(Will)」「身の周りや地域・社会の課題(Needs)」「学問領域(Academic)」の3つが重なる領域で「問い」を設定するよう徹底していく。その際には、メインクエスト(MQ)とサブクエスト(SQ)という枠組みを活用。最初は3つの視点から「私」を主語とする小さな問い・SQを複数作成する。それらを少しずつ融合させ、最終的にそれらを俯瞰し深化させたMQへと発展させていく。段階的に問いを深めていくことで生徒が自然と問いを自分事にできるような工夫がなされている。

11月にはこうして深めた問いをもってインターンシップに取り組む。全国の企業を対象に、基本的には自らアポイントを取る。当初は校内から反対意見もあったが、実施してみると普段はおとなしい生徒がインターンシップ先から高い評価を受けて自信をつけて帰ってくるといった成果が徐々にみられるようになり、校内の評価も変わっていった。推進部の森田直樹先生は、「インターンシップ中は教員に生徒の

現場を巡回してもらっています。校外で生徒が頑張る姿や企業からの肯定的な声に直接触れることで、探究活動への前向きな雰囲気醸成されてきたと感じています」と話す。

2年生では1年生の経験を土台に、地域や社会に飛び出して自分のテーマを検証するFWへと進む。夏休み前には一斉にアポイントメントの電話をかけ、生徒は自らの力で実践的な学びの場を獲得していく。生徒の自主性を基に行うFWに加え、2025年度には1～2年生を対象に、推進部主催の「合同FW」を新たに開始し、25人が参加。地元のみなかみ温泉を訪れ、観光地が抱える課題を肌で感じてもらう活動だ。観光の問いを立てる生徒が多いことから企画したと、森田先生は立案の背景を語る。「生徒は『地域が活性化すればいい』や『観光客がたくさん集まればいい』といった安直な答えを出しがちです。そこで平日の温泉街を実際に歩き、現場で働く人の生の声を聞いたうえで、もう一度自分の問いを見直してほしいという狙いがありました」。参加者からは「現場の状況を肌で感じる事ができた」と好評で、1年生の参加者が翌年2年生になってみなかみの探究に取り組むなど、現場での気づきが探究に活かされている。

そして、こうした探究活動を支えるのがオンラインで生徒に伴走する「学生アドバイザー」だ。毎年30～40人ほどを組織しており、うち7割は卒業生。また多角的な視点を確保するため、外部

の学生にも積極的にアプローチしている。県内の大学には教員が年に1回直接出向き、大学に学内での周知に協力してもらっている。推進部長の志村克樹先生は「外部の学生アドバイザーからは、『先輩から勉強になると言われた』『自分の研究の参考になっている』という参加理由を聞いています。学生にとってもWin-Winの関係にし、持続可能な取り組みにしていきたい」と話す。

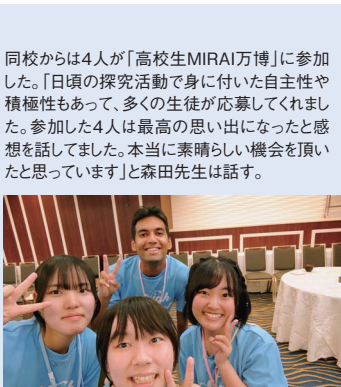
生徒の積極性が、 教員の意識を変える

財団の助成を受け、ここ数年で生徒と教員が大きく飛躍したと志村先生は話す。「生徒に関しては、自主的に外へ飛び出す積極性が顕著になりました。1年生のインターンシップは当初、学校側で訪問先を用意していましたが、次第に自分で選びたいという声が出て、昨年度は半数以上が自分たちで訪問先を見つけています」。2025年7月に財団が主催した「高校生MIRAI万博」にも多くの生徒が手を挙げ、結果4人が選出されて万博の大舞台で自分たちの想いを発信した。こうした生徒の変化や先進校の視察を通して、教員の意識も変わったという。「インターンシップも今ではすっかり定着し、先生方からアイデアが出るようになりました」(志村先生)。現在は、校外では先進校の視察、校内では高校での探究が大学の学びにどう役立っているのかを追跡した「卒業生調査」のフィードバックとケーススタディという3つの要素で教員研修を行い、探究活動のブラッシュアップを図っている。

2019年から探究活動の充実を掲げ、着実に歩みを進めてきた高崎北高校。生徒・教員双方の心のエンジンがかかり、いい流れができてきたことを受けて、志村先生と森田先生は「『探究をやりたいから高北に行きたい』という中学生や、『高北の探究なら携わりたい』と思う地域の方を増やし、『探究といえば高北』と選ばれる学校にしていきたい」と次なる目標を見据える。



みなかみ温泉での合同FWの様子。1・2年生を対象に募集したところ、予想を上回る40人が応募してきたという。



同校からは4人が「高校生MIRAI万博」に参加した。「日頃の探究活動で身に付いた自主性や積極性もあって、多くの生徒が応募してくれました。参加した4人は最高の思い出になったと感想を話しました。本当に素晴らしい機会を頂いたと思っています」と森田先生は話す。

2024年度
カテゴリー

1 沖縄県立開邦高等学校

開邦雄飛 一自ら育ち、自走する集団の育成プログラム～

生徒が授業を動かす 探究委員制度

開邦高校は校訓に「開邦雄飛」を掲げ、1986年に創立。2016年には開邦中学校が開校し、併設型中高一貫校として6年間を通した教育に取り組んでいる。同年、高校では理数科・英語科・芸術科という3学科編成を見直し、理数科と英語科を統合した学術探究科と芸術科の2学科編成に再編した。両科では、1年生で「探究基礎」、2年生で「探究活動」、3年生で「進路探究」をテーマに掲げ、探究活動に取り組んでいる。

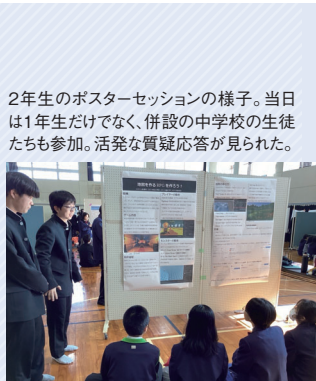
1年生の「探究基礎」では、年度初めにクラスから4名ずつ選出された生徒が、授業の進行や活動の運営を担う「探究委員」制度を導入している。教務部で総合探究・キャリア教育を担当する野村幸義先生はその狙いについて、「教師側がカリキュラムを進めるとどうしても一方通行になりがちです。生徒たちに主体的に動いてもらうために、委員制度をとっています」と話す。探究委員は事前に集まり、レジュメで流れを確認し、疑問点があれば野村先生に聞き、進行の役割分担を決める。委員同士で前半・後半で役割を分けるなどの工夫をしながら、探究委員自身もグループでの探究にも取り組む。

1年生の前半は宇宙空間で生き延びるためのアイテムをチーム内で話し合いながら決めていくNASAゲームや、グループで校内を歩き回り、不思議に思う場所やものをスケッチしたり写真に収めたりしながら「謎」を発見し発表するという校内の謎探しの取り組みを実施。生徒のワクワク感を喚起するとともに、チーム内の合意形成を図り、日常の中に潜む問いを可視化する力を養っていくカリキュラムとなっている。

1年生の探究活動の山場となるミニ探究は、学術探究科と芸術科をシャッフルし、4名程度のグループで実施。テーマは基本自由とし、フィールドワークや取材活動など校外での活動が



科学探究・家庭科の様子。アレルギーの方々を含め幅広く楽しんでもらえるように乳製品代用のお菓子・レシピを開発し、学園祭でクッキーの販売も行った。



2年生のポスターセッションの様子。当日は1年生だけでなく、併設の中学校の生徒たちも参加。活発な質疑応答が見られた。

推奨されている。沖縄の方言を使った昔話を研究し発表会で実演したグループや、焼き肉チェーン店の広報戦略についてインタビューを行ったグループなど、多様なアプローチで探究が行われた一方で、なかなかうまくいかずもややした気持ちを抱えるグループもいる。しかし、そのことを野村先生は否定的に捉えていない。限られた時間の中で、やりたいことのすべてが実現できないのは当然のことであり、何が課題だったのかをつかむことこそが2年生の探究活動など次のステップへの糧になるという考え方だ。3学期には、1年間の活動を振り返りながら、2年生の発表会を実際に見学し、先輩たちの取り組みから刺激を受けるという、総括と移行の時間をとっている。

2年生では、学術探究科の探究活動は「文科探究」と「科学探究」に分かれ、文科・科学領域の教科を担当する教員の指導の下、グループ探究に取り組む。同校では人間関係形成や協働力の育成を重視しており、基本はグループ探究としている。しかし芸術科は「共生社会」などの大きなテーマのもとで各々の専門性を深めることを目的としているため、個人での探究活動も認め、各科の特徴に合わせた枠組みとしている。

5月末から6月にかけては「テーマ検討会」が設けられ、自分たちの方向性を発表して他の生徒から意見をもらう。ここでテーマが深まったり、軌道修正されたりしながら固まっていく。年度末には「活動報告書」を作成し、

生徒一人ひとりの振り返りの機会とするとともに、図書室に配架することで、中学生や後輩たちが参考にできる持続可能な仕組みも構築されている。

助成が広げた活動の幅と、 学校全体への波及効果

ここ数年で、県外の学会への参加やSDGsの外部コンテストでの受賞、首里城復興に関連した地元企業との商品開発など、学校の枠を飛び出して果敢に挑戦する生徒が増えていることを受け、野村先生は「財団の助成が後押しになって、生徒の積極性は飛躍的に高まっています」と手応えを語る。また同校では教員の先進校視察にも積極的に取り組んでおり、外部の取組みに刺激を受け、生徒が企画運営する発表会の構想や、学校オリジナルのキャリアパスポートを導入するなど、具体的な動きにつながる事例が出てきているという。

探究活動をさらに学校に定着させるためには、「各教科の授業の中で探究的な視点を養うことができれば、総合的な探究の時間におけるハードルも下がり、教員の負担軽減や自走力につながるはず」と、野村先生と共に探究活動を主管する村中瑞乃先生は語る。野村先生も「これまでの取り組みの成果をしっかりと認識したうえで、教員間でこれからの本校の探究活動の方向性を決めていきたい」と力を込める。生徒の主体性と教員の新たな視点を土台に、開邦高校は持続可能な探究活動の仕組みづくりへと歩みを進めている。

2025年度
カテゴリー

2

学校法人沖縄科学技術大学院大学学園

昆虫バイオサンプリング研究

～高校生×昆虫データベース研究プロジェクト、データでつなぐ沖縄の未来～

高校生とOISTが沖縄の
生物多様性調査に挑む

「世界最高水準の研究」と「沖縄への貢献」という2つの軸を掲げて2011年に設立された沖縄科学技術大学院大学(略称OIST)では、約10年前から沖縄島全域において昆虫や鳥類、哺乳類、植物など多様な生物を対象としたモニタリング調査を続けている。しかし、OISTだけで広域かつ継続的にデータを集めるには限界があり、そこで着目したのが県内各地の高校生との協働だったという。「同じ沖縄でも地域によって生態系が異なり、採集できる昆虫も異なります。各地で生活する高校生と協働することで、より多様なデータを得ることが期待できます。高校生たちにとっても、私たちが蓄積してきた知見やノウハウを提供しながら、昆虫という身近な存在を通じて科学研究に触れる機会が得られるという、両者に価値をもたらすプログラムとして設計しました」と語るのは、野外での調査研究活動を支える海洋・陸域科学セクションの諏訪部真友子氏だ。

2025年度にスタートした本プログラムは、6月に参加希望者の高校生をOISTキャンパスに集めてのキックオフワークショップで幕を開けた。その際、プログラムの概要説明に加え、OISTや研究活動そのものに親しんでもらえるよ

う、キャンパスツアーや研究者による研究紹介も実施。高校生が科学研究の最前線に触れる貴重な機会となった。

プログラムへの参加を決めた学校や生徒には個別訪問による指導を行い、そこで得た知識を駆使して、7月から各地で昆虫採集や観察、分類が進められた。OIST側も日々、メールで高校教員と連絡を取り合い、必要に応じて学校や採集場所を訪問して直接指導する中で、生徒との交流を深めていった。

約半年の採集活動を経て、2026年1月にはOIST内で成果報告会を開催。本プロジェクトの関係者だけでなく、幅広い研究者が出席し、発表に対して多くのコメントや質問が寄せられる、生徒同士のディスカッションも活発に行われた。

さらに3月には、希望者を対象に日本生態学会への参加機会も設けている。最終日に開催されたポスター報告会では、第一線の研究者から直接、質問や助言を受けた。「最初は緊張していた生徒たちも、説明を繰り返すうちに上手になっていき、引率の先生方からも学会でさまざまな意見や研究に触れたことで、生徒たちが新たな視点や気づきを得たことを喜ぶ声が聞かれました」と諏訪部氏は振り返る。

2026年度からは生徒の
習熟度に応じた支援方法へ

初年度となる2025年度は、キックオ

フワークショップに4校から計80名の生徒が参加。「総合的な探究の時間」などの授業単位で参加した学校もあれば、校内で希望者を募って課外活動として取り組んだ学校もあるなど、参加形態はさまざまで、昆虫や科学への関心度合いにも幅があったという。結果として、実際に採集活動に取り組んだのは約50名で、成果報告会には25名、日本生態学会には2校から7名が参加した。参加者からは「少しやり方を変えるだけで、より多様な昆虫を採集できる。いろいろ自分で試してみたくなった」「昆虫という身近な存在が、世界的な研究テーマになっていることが実感できた」などの感想が聞かれ、科学研究への意欲の深まりが見て取れたという。

一方で、生徒の習熟度に応じた支援が必要という課題もあり、2026年度は自ら研究を進める「自走型」と、OISTの支援を受けながら進める「伴走支援型」を選択できる仕組みに改めた。特に伴走時に重視しているのが、研究テーマ設定への支援だという。「当初は技術的な支援を中心に考えていましたが、テーマ設定の質問や相談も多くありました。ただ昆虫を採って分類するだけでなく、そこからどのような問いを立て、どのような研究にしていかがが重要であり、テーマ設定段階からの伴走が大切だと気づかされました」と諏訪部氏は語る。

将来的には、本プログラムを各学校の探究授業などで自走できるようパッケージ化し、県内の高校に横展開していく構想を描いている。「私たちの目的は、沖縄での生物多様性モニタリングを持続可能なものにし、生態系保全に資する研究成果を導くこと。地域の高校生が沖縄の自然環境を見守る当事者となって、私たちとともに貴重な生態系を支え続けていく、そんな仕組みをつくっていきたいと考えています」(諏訪部氏)



採集活動は学校単位で実施。OISTから指導を受けた知見やスキルを活かして、7月から採集活動が行われた。

キックオフワークショップは、OISTの公用語である英語で実施。生徒たちから「自分たちも英語で発表したい!」という声も上がるなど、国際意識を養う機会になった。

2025年度
カテゴリー

3

東海国立大学機構 名古屋大学

学術研究・産学官連携推進本部イノベーション・アントレプレナーシップ推進室

未来のインパクト創出に挑戦する社会的起業家の卵
「インパクト・アントレプレナー」発掘・育成プロジェクト起業家志望の学生の
意識変化を見据えた取組み

名古屋大学において産学官連携を担う学術研究・産学官連携推進本部の中で、アントレプレナーシップ教育や研究シーズによる事業化支援を推進するのがイノベーション・アントレプレナーシップ推進室だ。同組織では、東海地区約30大学による横断プラットフォーム「Tongali(トンガリ)」や大学内の共創拠点「Idea Stoa(アイデアストア)」の運営を通して、同大学の学生をはじめ、全国の大学生や中高生を対象に多様なプログラムを提供してきた。そこに2025年度から加わったのが、高校生～大学1・2年生を対象に「インパクト・アントレプレナー」の育成を目指す本プロジェクトである。

同大学ではインパクト・アントレプレナーを、社会課題の本質を俯瞰的に、かつ「自分事」として捉え、検証と内省を繰り返しながら社会に正のインパクトをもたらすスキルとリーダーシップを備えた人材と定義する。「必ずしも起業をゴールに据えるのではなく、内発的な動機から長期的なスパンで“答えのない問い”に挑み続けられる人材を育てることが目的です」と語るのは、アントレプレナーシップ教育・起業支援担当URA(University Research Administrator)を務める野原かほり氏だ。

本プロジェクトを立ち上げた背景には、学生たちの起業に対する意識変化があるという。「近年では起業家志向の学生が急増しており、AIを壁打ち相手にすることで社会課題に対する意識や理解も飛躍的に高まっています。一方で、大きな構造変革が求められる時代において、AIが示す“正解らしき答え”を鵜呑みにするのではなく、自身の内面から湧き上がるような、手触り感のあるアイデアを醸成する機会の必要性を感じていました」と野原氏は語る。そこで着想を得たのが、社会的起業家たちが共通して語る「実践と内省



2025年度のSTEP-C秋季キャンプは、長野県下伊那郡根羽村をフィールドに実施し、高校生・大学生合わせて17名が参加。

本プロジェクトを経て、Tongali主催のビジネスプランコンテストに挑戦する学生も出てきている。



の反復」や「自身の価値観を揺さぶられる体験」だという。「そうした経験を積んできた起業家との対話機会や、同世代との実践・交流機会を設けることが、学生たちの内発性を高め、課題に向き合う自己認識を深めるきっかけになると考えました」(野原氏)

3つのSTEPで、
コミュニティを形成

本プロジェクトはSTEP-A、B、Cの3段階で構成されている。まずSTEP-A「FUTURE LAB」は、高校生も参加しやすい夏季休暇中に開催。「解くことができれば、社会課題を劇的に解決する問い」に挑戦し、その複雑さや難しさ、自身との接点を体感することで、「社会課題を俯瞰する力」と「挑み続けるマインド」を醸成しながら、社会的起業家としてのスイッチを入れる。

STEP-B「toi toi toi - “問い”の“ジブンゴト化”ワークショップ-」は、月に一度「Idea Stoa」に15名程度を集めてゼミ形式で開催。幅広い分野から招聘したゲストから、自身のイノベーターとしての歩みを語ってもらい、各段階での心の動きを共有・分析するワークショップを通じて「自分は将来、社会課題とどのように向き合っていくのか」を問い直す機会となっている。

集大成となるSTEP-C「主体的に動く自分になるDEEP FLOW CAMP」では、秋と翌春に選抜された15名が2泊3

日の合宿に参加。社会的起業家の伴走のもとに地域の社会課題に向き合い、観察と仮説→対話→リフレクションのサイクルを濃密に回すことで、課題解決に必要なクリティカルシンキングを養う。

これら3つのSTEPには、開催順に関係なく自由な参加が可能だ。「もともと中心に考えていたのはSTEP-Cで、そこで成果を出してもらうために、日頃から基礎スキルを醸成する機会としてSTEP-Bを、より多くの参加者に“火種”を灯すためにSTEP-Aを設定しました。STEP-CにはSTEP-A、Bの参加者を優先する形で選抜しています」と語る野原氏の狙い通り、最近では定期的に開催されているSTEP-Bを中心に、参加者同士のコミュニティ醸成につながっているという。

参加者の満足度も高く、「自分について数日間も考え抜く経験は初めて」「本音の言語化と、仲間との相互理解によって、自己認識が進んだ」といった声が寄せられた。主催側にとっても、「内省と実践の往復が当事者意識を喚起する」という仮説に手応えが得られたという。「将来的にはプロジェクトを体系化し、フレームワークとして連携する他大学に提供していく計画です。より多くの学生に自己と社会課題に向き合う機会を提供することが、社会全体でアントレプレナーシップを持った人材を増やしていくことにつながると考えています」と、野原氏は語る。

2025年度
カテゴリー

4

国立大学法人筑波大学

研究学園都市全体で構築する人材育成・交流モデルの提案
～つくば型チュートリアル学修の実装による知の連鎖と循環～履修者が年々増加する
「学問探究チュートリアル」

筑波大学が全学的な実装を図る「つくば型チュートリアル学修」では、個別指導を中心とした授業により、未来をデザインし社会を変革する人材の育成を目指している。そして「学問探究チュートリアル」(以下本プログラム)は、その第一歩として開設された初年次学生向けの選択履修科目。学生の興味関心を見定め、多様で奥深い学問に導くことを目的に2024年度にスタートした。

初年度の履修生は36人。履修生の反応は好評で、助成開始時の2025年度には41人、2026年度は71人と順調に増加している。2026年度にスチューデント・アシスタント(授業を補助する既履修生)を希望した学生は、2025年度履修者の半数におよび、受講生が次年度以降の運営に関わる循環も育ちつつある。

本プログラムの特徴の一つは、徹底した少人数での対話と議論であるチュートリアルセッションの前に、グループによるワークショップを配置した点にある。その理由をチュートリアル学修推進委員会の委員長を務める坪内孝司特命教授は「初年次の学生ということもあり、まずグループワークで対話や議論をすることのハードルを下げるという狙いがあります」と語る。

まずはガイダンス、アイスブレイクセッションを経て、チューター教員が自らの学問の道のりを語る「学究人生

紹介」の後に、「地球規模課題 de How to Think」のワークショップが始まる。学群をまたがって構成された5～8人ずつのグループごとに、貧困や戦争、平和、幸福、愛といった範囲の広いテーマがグループ内で提案され、各人がアイデアを付箋に書いて貼っていきディスカッションをする。多様なバックグラウンドを持つ学生同士が対話することで、同じテーマでも見え方が異なることを学んでいく。各人がまとめたアイデアを全員分、1枚のポスターにレイアウトして準備完了。続くポスターツアーでは、各グループ1人ずつで構成された新グループで各ポスターを巡り、自分のグループのポスターの前で、他のメンバーに対してプレゼンテーションする。「自分が書いた内容だけでなく、他のメンバーが書いた内容も自分の言葉で紹介します。他者の考えを傾聴し、それを言語化して伝えることも、内容理解に効果があるからです」と本プログラムを設計・運用するコアメンバーの棚橋沙由理准教授は語る。

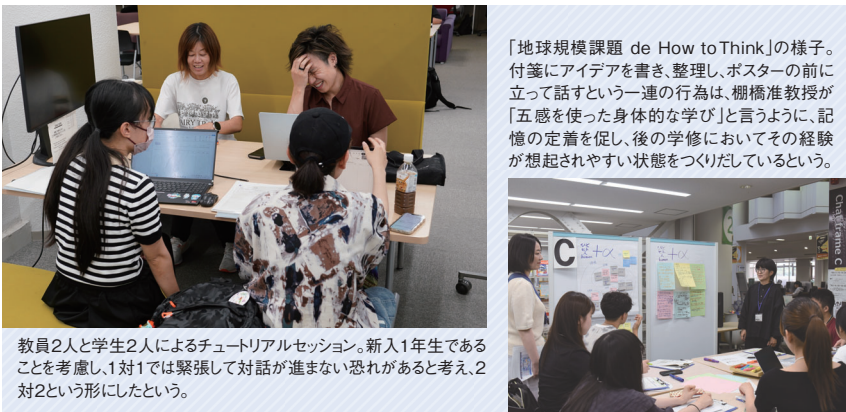
7月になると、それぞれが選んで参加する「選択制アクティビティ」が始まる。「ミュージアム・ビジット」と名づけられたアクティビティでは、2026年度は筑波研究学園都市内の4カ所の研究施設を選んで訪問し、研究員の学究人生や研究生活などについても話を聞いた。その他、学内でも4つのワークショップを企画。学生はこれらの中から150分×2回分のコマ数を受講する。「設定コマ数を超えた履修も可能にした

ところ、大半の学生が設定以上の受講をしていました。異なる分野の学生と学び合う魅力や意義を感じてくれた結果だと思います」(棚橋准教授)

チュートリアルセッションが
行動・意識変容のきっかけに

夏休み明けには、いよいよ教員2人と学生2人によるチュートリアルセッションが始まる。2対2という形にしたのも、なるべく心理的ハードルを下げるためだ。学生は分野が近い2人、教員は学生の関心に近い分野から1人、あえて少し遠い分野から1人を組み合わせ、異なる角度からの視点によって対話に膨らみを持たせる工夫をした。「学生の内発的な動機を醸成して創発を促すことが、本プログラムに通底するフィロソフィー。そうした学びの姿勢を初年次のうちに促進させることが、『つくば型チュートリアル学修』という最終形の実装に向けて非常に重要であり、良いスタートを切れていると感じています」と坪内特命教授は話す。

次年度以降の展開としては、外的な環境が醸成されつつあり、コラボレーションを順次増やしていく全学的な動きが始まっているという。いくつかの研究機関からも、1年生向けの研究紹介をしたい旨のリクエストが来ている。また、「筑波研究教育機構(仮称)」の立ち上げに向けた覚書が締結されたこともあり、各研究機関との結びつきを進める入り口として、本プログラムに期待する機運は学内外で高まっている。「6つのステップで構成される『つくば型チュートリアル学修』において、本科目はステップ1・2に位置づけられます。今後10年かけてこの学修方法を大学全体に実装していく過程で生まれた成果や変化を積極的に社会へ発信し、筑波研究学園都市内の企業や研究機関からの支援が得られるような環境づくりにも取り組んでいきたい」と、坪内特命教授は10年後を見据えた構想を語る。



教員2人と学生2人によるチュートリアルセッション。新入1年生であることを考慮し、1対1では緊張して対話が進まない恐れがあると考え、2対2という形にしたという。

「地球規模課題 de How to Think」の様子。付箋にアイデアを書き、整理し、ポスターの前に立って話すという一連の行為は、棚橋准教授が「五感を使った身体的な学び」と言うように、記憶の定着を促し、後の学修においてその経験が想起されやすい状態をつくりだしているという。

2025年度
カテゴリー

5

桜美林大学

越境する教育パートナーシップを育成する認定型研修プログラム「Bridge」

教員と社会人の協働による
探究授業の開発と実践

桜美林大学では、高校の探究授業を支援する高大連携事業「ディスカバ!」を2019年から運営しており、この事業の運営体制を活用して2025年に新設されたのが、高校教員と多様な外部人材を対象とした「Bridge」だ。普段あまり交流のない両者の協働により高校生向けの探究プログラムを開発し、授業で実践もするというプログラムになっている。ディスカバ!の運営も務めるBridge事務局の櫻井美季氏は「先生だけでなく教育に関心を持つ企業人や専門家といった人材も広く対象とし、新たなコラボレーションの実践を目的としたプログラムです」と語る。

プログラムの参加募集は、高校教員対象の「ティーチャーコース」と社会人対象の「パートナーコース」に分かれている。応募者には、ディスカバ!プログラムの連携先の高校教員、すでに社会人向けのワークショッププログラムに参加されている方、財団の助成先、またSNSの広告から応募された方も多く、「教育に携わりたいと考えている人材の潜在的ニーズをうまくキャッチアップできていると考えています」と櫻井氏は語る。

プログラムは、4つのフェーズに分かれ、研修初期の1～2カ月は、オンラインによる導入期間で、オンデマンド動画の教材を視聴しレポートを提出。7月中旬からオリエンテーションがオンラインで行われる。8月には3日間の集中合宿として、参加者全員が同大学に集って対面演習が行われる。チームは両コースから2～3人ずつで編成され、1日目に全体でのワークショップ体験、2日目にはチームに分かれてアイデアをまとめ、3日目にはプログラムとして仕上げるという濃密なスケジュールだ。

9月以降は、対面演習で組んだチームごとに、オンライン等でのミーティングを重ね、高校での実践に向けてプログラムをブラッシュアップさせてい



対面演習の最終日に当たる3日目には、作成したプログラムのデモを実施した。

認定報告会での集合写真。この第1期生の中の有志が第2期生のサポーターも務めているという。



く。月に一度、全体ミーティングで進捗状況の共有が行われる以外は、基本的にチーム主導での活動が続く。その間も事務局は相談窓口をつくり、サポートに努めている。2025年度は、全10チームが18の高校で22回の実践を行った。実践されたプログラムの内容は実に多彩だ。元アナウンサーのパートナーがいたチームでは、入学前の新入生に向けた学校PRショート動画を制作するプログラムを実施。チームビルディング、インプット、制作、試写会、そして独自の賞の授与までと、実に8コマにもわたる授業設計で生徒の主体的な参加を引き出した。発酵の専門家と組んだチームは、1日でできる味噌づくりを通じて食と科学への探究心を育てるプログラムを展開するなど、外部人材の専門性がプログラムの可能性を大きく広げる事例が生まれていた。

幅広い人材がプログラム開発に加わることで授業の内容は多様になり、生徒の反応が普段とは明らかに変わった、熱量が高い教師の姿に生徒たちが驚いていたという声も届いている。パートナーコースの参加者には、地域の小学校の学校運営協議会に参加し始めた事例もあるなど、教育との関わり方を根本から見直すきっかけになっているケースもある。

探究学習を全校的に
推進する力を身につける

2026年3月に同大学で開催された

認定報告会では、実践内容だけでなく、プログラムが持つ社会的意義や、教育現場が抱える問題までをも含めた発表が相次いだ。「授業での実践の様子を表情を変えることなく退屈そうに眺めていた先生がいたそうで、生徒よりもまず教員の心を駆動させなくてはならないという気づきを報告してくれたチームがありました。他にも現場で拾い上げた気づきを話し合い、現場をどう変えていくかという発表をしてくれたチームがいくつもあり、本プログラムの意義を証明する報告会になりました」と、事務局を運営する勝瀬祐氏が手応えを語る。

報告会の5日後、ディスカバ!に応募してきた中高生向けに、3組のチームが同大学のキャンパスでプログラムの実践を行う1dayプログラムも実施。参加者は自ら応募してただけに積極性は高く、3組のチームメンバーも大きな刺激を得たという。

「1期の修了生の何人かには、2期のプログラムのサポーターとして参加してもらい、フィードバックしたり、壁打ちの相手を務めたりしていただいています。こうしたつながりが年々積み重なることで、コミュニティが広がっていくことを期待しています」と櫻井氏。教員と社会人がパートナーシップを結ぶというこのチャレンジは、新たな探究教育の実践だけでなく、学校と社会をつなぐ架け橋＝Bridgeとして、大きな可能性を秘めている。

カテゴリー

1

都道府県順					
採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2024	北海道札幌西高等学校	北海道札幌市	総合的な探究の時間(WRAPS)次世代リーダーへの轍づくり ～さあ、冒険しよう。問いが人を突き動かし、問いが世界を変える～	960名	200万円
2024	北海道平取高等学校	北海道沙流郡	ダイバーシティ&インクルージョンを学ぶ高校 ～科目「アイヌ文化」と多様性、共生・協働をテーマとする 「探究学習」の二つを軸として～	31名	100万円
2024	北海道函館西高等学校	北海道函館市	「函西 Well-being共創プロジェクト」～志高く、未来を創る～	706名	100万円
2025	北海道札幌月寒高等学校	北海道札幌市	探究学習プロジェクト「BEING ALIVE」	960名	200万円
2025	北海道札幌東高等学校	北海道札幌市	自ら人生を切り拓く力を育てる「東高シンカ」	960名	200万円
2025	北海道札幌南高等学校	北海道札幌市	札幌の総探(minaminQ)大学進学後も通用する専門的な 研究への第一歩～メタバースを活用した探究し続ける心の 涵養と世界に貢献する人材の育成～	949名	200万円
2026	北海道札幌国際情報高等学校	北海道札幌市	未来を共創する力を育てる：次世代 Global Citizen プログラム	960名	200万円
2026	北海道千歳高等学校	北海道千歳市	千高総探プログラム「MIRAI探究」を通して地域と未来の共創を図る ～地域との連携を通じ、国際的な視野をもち 未来を共創するリーダーの育成～	690名	200万円
2026	北海道夕張高等学校	北海道夕張市	チャレンジ・モア・スピリットプロジェクト ～理想の夕張をつくる取り組み～	60名	100万円
2026	北海道室蘭栄高等学校	北海道室蘭市	未来を揺らせ！ ～Sakae Innovation Spirits～ 「地域・高大連携による探究深化プログラム」	510名	200万円
2026	北海道池田高等学校	北海道中川郡	地域とともに学び続ける高校へ～池高キャリア教育プログラム～	64名	100万円
2026	北海道富良野高等学校	北海道富良野市	富良野高で醸成する多文化共生 ～『富良野高の心のあり方』起動プロジェクト～	451名	193.8万円
2024	青森県立百石高等学校	青森県上北郡	青森県立百石高等学校普通科 「百探―百石の上にも三年探究プロジェクト」 コーディネーターと外部人材を活用した探究活動の活性化	200名	200万円
2025	青森県立三戸高等学校	青森県三戸郡	三戸みらいキャンパス～地域の、そして自分自身の「みらい」を 「三戸郡」というキャンパスで描こう～	85名	100万円
2025	青森県立木造高等学校	青森県つがる市	木造(きづくり)・人づくり・地域づくり ～「MAP(Mokko Asumiru Project)」～	431名	200万円
2026	青森県立三沢高等学校 定時制課程	青森県三沢市	わくわくハイスクール! ～地域産業や郷土の文化・生活を学んで伝える～	55名	100万円
2026	青森県立八戸商業高等学校	青森県八戸市	問いからビジネスへ 八商リアルプロジェクト ―課題研究と総合実践をつなぐ、地域探究型・実践型学習―	243名	200万円
2024	岩手県立盛岡第一高等学校 ^{*1}	岩手県盛岡市	「M探」Plus Science and English	840名	70万円
2026	岩手県立大船渡高等学校	岩手県大船渡市	デジタルと探究でDAIKOトランスフォーメーション! ～世界の舞台へ導く「シン・大船渡学」～	370名	200万円
2024	宮城県小牛田農林高等学校	宮城県遠田郡	“農林魂”で未来をひらく!～自分らしく生きる力をつけるために～	375名	200万円
2024	宮城県仙台向山高等学校	宮城県仙台市	向陵Plearning～ともに創る未来への一歩	400名	200万円
2024	学校法人 常盤学園高等学校	宮城県仙台市	未来を拓くアントレプレナーシップ教育「スタートアップ」	474名	189.7万円
2024	宮城県宮城野高等学校 ^{*1}	宮城県仙台市	「未来構想ゼミナール」による自他の「しあわせ」のための 「未来デザイン力」育成プログラム	720名	100万円
2024	宮城県気仙沼高等学校 ^{*1}	宮城県気仙沼市	海を素材とするグローバルリテラシー育成 ～世界を舞台に豊かでたくましく活躍できる人材を目指して～	620名	100万円
2026	宮城県加美農業高等学校	宮城県加美郡	多様な学びで Treasure Hunting ～宝の地図の「×印」――そこは生徒の成長の隠し場所だ!大作戦～	151名	150万円

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2026	秋田県立由利高等学校	秋田県由利本荘市	由利高 未来へ進め 探究航路 プロジェクト【yuri-journey-project】	295名	200万円
2024	山形県立小国高等学校	山形県西置賜郡	白い森未来探究学 ～地域に誇りと愛着をもち、 グローバルな視点で地域創生に挑む人材の育成～	50名	100万円
2025	学校法人新庄学園 新庄東高等学校	山形県新庄市	プレゼンテーション演習プログラム ～SDG's/地域課題 答えのない課題に自分なりの答えを～	328名	200万円
2026	山形県立鶴岡工業高等学校	山形県鶴岡市	「鶴工パワー」で創る未来：全領域(地域課題・STEAM・国際・文化)を 融合した「3年間一貫・全校型アントレプレナーシップ教育モデル」の 構築と教育イノベーションの牽引	459名	200万円
2024	福島県立湖南高等学校	福島県郡山市	地域創生に関わる日本一の学校を目指して～地域産業の継承と 年次縦断の探究活動をととした、社会に貢献できる人材の育成～	60名	100万円
2026	福島県立喜多方高等学校	福島県喜多方市	「きたかた・グローバル・リサーチ」 ～自分と地域を知る・自ら行動する・未来へ繋ぐ 地域課題探究型共創プログラム～	386名	200万円
2025	茨城県立竹園高等学校	茨城県つくば市	竹園探Qプロジェクト ～竹のように地域に根ざし、世界へ伸びる学び～	637名	200万円
2026	茨城県立古河中等教育学校	茨城県古河市	Σプロジェクト：多様な知の総和で生み出す「共感とアクション」 ～社会を変える、自分が変わる実践的探究～	227名	176万円
2026	茨城県立筑波高等学校	茨城県つくば市	筑波山麓再興プロジェクト	73名	100万円
2024	栃木県立那須高等学校	栃木県那須郡	地域社会の未来を担う人材育成のための 「那須高校・魅力化プロジェクト」	78名	99.4万円
2024	栃木県立佐野東高等学校	栃木県佐野市	啓(Kei)～未来をひらく～	589名	200万円
2025	宇都宮海星学園 星の杜中学校・高等学校	栃木県宇都宮市	「チェンジメーカーズ・ダイアログ ～概念を問い、共に創る未来～」	350名	200万円
2025	栃木県立真岡高等学校	栃木県真岡市	<至誠>探究プログラム～STEAM教育による探究学習を通して、 自己の在り方を考え、より良い解決とより良い社会の実現を目指す～	571名	200万円
2024	群馬県立伊勢崎高等学校	群馬県伊勢崎市	iTanQ～伊高の探究が世界をつなぐ～	867名	200万円
2024	群馬県立高崎北高等学校	群馬県高崎市	“未来を拓く”あららぎ探究 ～問いを磨き、生徒も教師も学び続ける学校～	480名	200万円
2025	群馬県立伊勢崎清明高等学校	群馬県伊勢崎市	「新たな可能性の発見」～自分の可能性と地域社会の可能性を 発見し、その実現のために探究する力【SEIMEI力】の育成～	595名	200万円
2025	群馬県立尾瀬高等学校	群馬県沼田市	群馬県立尾瀬高等学校 KIZUKU!プロジェクト	144名	200万円
2026	樹徳高等学校	群馬県桐生市	デジタル・プラットフォームと多層的伴走による 「探究の自走化」事業の構築 ～探究のプロセスの活用を一生モノにする～	882名	147.5万円
2024	埼玉県立秩父高等学校	埼玉県秩父市	「つなごう!ちちこう!」 ～学校と地域をつなぐ 秩父高校地域協働プログラム～	372名	200万円
2025	さいたま市立 大宮国際中等教育学校	埼玉県さいたま市	3G Project(Grit・Global・Growth)	934名	200万円
2025	埼玉県立坂戸高等学校	埼玉県坂戸市	S-Field 一坂高総探プロジェクト―	713名	200万円
2026	埼玉県立上尾高等学校 定時制課程	埼玉県上尾市	定時制高校生の社会移行を支える「上定(あげてい)モデル」 ―未来予期型の産学連携キャリア教育プログラム―	60名	100万円
2025	千葉県立佐倉南高等学校 定時制夜間部	千葉県佐倉市	健康まちづくりプロジェクト	51名	181.4万円
2025	千葉県立袖ヶ浦高等学校	千葉県袖ヶ浦市	袖ヶ浦市魅力度アッププロジェクト×教科等横断的課題研究	832名	200万円
2025	麗澤中学・高等学校	千葉県柏市	心の力を育み、未来を創造する知恵と逞しさを身に付ける 体験型探究学習プログラム「自分(ゆめ)プロジェクト」 ～「その先」をイメージしながら築く「自分」～	511名	200万円

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2024	東京都立小金井北高等学校	東京都小金井市	未来を創るCOKITA	500名	200万円
2025	東京都立新宿高等学校	東京都新宿区	全員指導者たれ 総合的な探究の時間 「新宿学」を通した持続可能な未来を創るリーダー育成 地域・企業探究から個人探究へ	640名	200万円
2026	東京音楽大学付属高等学校	東京都豊島区	音楽の力を探究し社会に発信する創造プログラム	223名	200万円
2026	東京都立立川国際中等教育学校	東京都立川市	立国LEADERプログラム	431名	200万円
2022	自修館中等教育学校*2	神奈川県伊勢原市	C-AIR(シー・エア)プログラム	192名	200万円
2024	神奈川県立 横浜瀬谷高等学校	神奈川県横浜市	総合的な探究の時間「未来共創プロジェクト」を教育課程の中核とする カリキュラムマネジメント ～「持続可能な社会の創り手として、 これからの社会で活躍できる資質・能力」の育成を目指して～	951名	200万円
2026	神奈川県立平塚農商高等学校	神奈川県平塚市	六次化産業を題材にした実践的探求活動の取り組み ～地域への開かれた学校を目指して～	893名	200万円
2025	新潟県立中条高等学校	新潟県胎内市	中条高校未来探究 ～「中条高校地域アカデミー」を中核とした六花プラン～	140名	200万円
2025	新潟県立津南中等教育学校	新潟県中魚沼郡	生徒が自走する「津南妻有学」 ―地域・社会でのアクションとリフレクションの循環により、 「夢の実現」へつなげる探究学習	171名	200万円
2026	新潟県立見附高等学校	新潟県見附市	地方創生とインクルーシブ教育を核にした探究活動の実践 ～地方創生と共生社会をつなぐコラボティブ・マーケティング～	215名	200万円
2025	学校法人片山学園 片山学園中学校・高等学校	富山県富山市	夢叶う未来へのKIP(Katayama Inquiry Program) ―アーギュメントを主軸にした探究活動による問題発見力・ 的確な予測・革新性の育成とその客観的評価の方法の開発―	136名	200万円
2025	富山県立富山高等学校	富山県富山市	「未来〇学」人類の過去、現在、未来そして、発展的未来を探究する ～発展的未來の貢献者の育成～	479名	200万円
2026	富山県立砺波高等学校	富山県砺波市	「となみSTEAM」による地域変革リーダー育成プログラム	452名	200万円
2024	金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属高等学校	石川県金沢市	ミライシコウするグローバル人材の育成 ～地域と世界に開かれた 北陸コンソーシアムの探究マインド醸成を目指して～	300名	200万円
2024	石川県立輪島高等学校*1	石川県輪島市	「WAJ活(輪島活性化プロジェクト)」 特別編未来に向けて輪島を創造しよう ～輪高生(りんこうせい)による街づくりプロジェクト(街プロ)～	254名	70万円
2025	石川県立大聖寺高等学校	石川県加賀市	「聖高Nexus」が生徒の心に火をつける ～地域共創による探究支援プログラムの構築～	459名	200万円
2026	石川県立鹿西高等学校	石川県鹿島郡	100年先へつなぐバトン ～能登の創造的復興を担う「地域共創型」探究プロジェクト～	214名	200万円
2025	学校法人青池学園 AOIKE高等学校	福井県小浜市	高校生がぐるぐる回す「マテリアル循環社会」 ―能登半島地震を契機とした古材レスキュー活動への 正統的周辺参加―	284名	100万円
2024	山梨県立北杜高等学校	山梨県北杜市	北の杜から世界へ ～高校生の力で地域活性化に挑む～	339名	200万円
2024	山梨県立甲府西高等学校*1	山梨県甲府市	IBの手法を基礎とした「総合的な探究の時間」における課題研究論文の 作成とその成果の県下各高校への普及活動及び、課題論文発表大会 (n-Quest 西高探究の日)の全県開催	511名	100万円
2024	長野県辰野高等学校	長野県上伊那郡	「TATSUNOVision2030」プロジェクト 「一人ひとりの活躍がづくり出す 住み続けたいまち」 &「地域に愛され必要とされる学校」を目指して!	200名	200万円
2024	長野県白馬高等学校	長野県北安曇郡	「ローカル・ブライド」を持ち地域課題を ワクワクしながら解決できる人材を育成	142名	130.6万円
2024	長野県松本県ヶ丘高等学校*1	長野県松本市	信州学からグローバル課題へ ―探究を実践し続ける縣陵人を育てる Kenryo Researchers Program―	970名	100万円
2025	長野県上田高等学校	長野県上田市	『いのち』を視点に統合的・全体的アプローチによって SDGsを探究する。	598名	200万円

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2025	長野県長野野高等学校	長野県長野市	「地域から世界へ」未来を担うグローバルリーダーの育成 ～アントレプレナーシップ醸成プログラム～	718名	200万円
2025	長野県野沢北高等学校	長野県佐久市	共学共創コンソーシアムで構築する未来の探究校 ～野沢北探究programが育む、地域・日本・世界で輝く探究人～	600名	200万円
2026	長野県松代高等学校	長野県長野市	「ワクワクを学びに!」～デジタル技術を地域連携に活用～	224名	200万円
2024	岐阜県立恵那高等学校	岐阜県恵那市	知的なときめきから世界を変える ―社会に感動を与える探究イノベーター育成システムの構築―	400名	200万円
2024	岐阜県立加納高等学校	岐阜県岐阜市	岐阜から世界へ、世界から岐阜へ ～グローバル探究実践事業(GLI)を 通じて、広い視野をもつ生徒を育成する～	560名	200万円
2026	岐阜県立 岐阜総合学園高等学校	岐阜県岐阜市	未来創造 共創キャリア探究プロジェクト	839名	200万円
2024	静岡県立駿河総合高等学校	静岡県静岡市	地域防減災コミュニティプロジェクト(LDCP) ～多様な価値観で、まちの未来創造を生徒・地域とともに～	233名	100万円
2024	静岡県立三島北高等学校	静岡県三島市	三島北型生徒エージェンシーの育成とメタ認知 ～WWLのレガシーの発展的継承～	574名	200万円
2025	静岡県立富士東高等学校	静岡県富士市	企業・大学との連携・協働によるAIの活用を含めたアカデミックな 探究を目指したプログラムの改善・充実	523名	200万円
2026	学校法人藤枝学園 藤枝順心中学校・高等学校	静岡県藤枝市	探究プログラム「My Step」 ～自分の「好き」を起点に、社会と繋がる探究的学びを通して未来を拓く～	236名	200万円
2026	沼津市立沼津高等学校	静岡県沼津市	まちの学びをつなぐ探究エコシステム in 沼津 ―小中高・地域をつなぐ“探究のハブ校”としての挑戦―	385名	200万円
2024	愛知県立 犬山総合高等学校	愛知県犬山市	探究学習を軸としたカリキュラムの実践による「チェンジメーカー」の育成 ～ビジネス・デジタルの力で地域の課題解決に挑む～	480名	200万円
2025	愛知県立 愛知総合工科高等学校	愛知県名古屋市	探究型カリキュラム×情報系カリキュラムによる 実践的DX人材育成プログラム	514名	200万円
2025	金城学院中学校 高等学校	愛知県名古屋市	社会に開かれた わたしをつくるアトリエ ～つくることで、「わたし」「他者」「システム」に気づき、 Well-beingな世界を創り出す一歩を踏み出す～	444名	94万円
2026	愛知県立刈谷北高等学校	愛知県刈谷市	国際探究モデルを展開・自走化プログラム ―国際探究科の実践を基盤とした探究活動の全校化と持続的発展―	758名	120万円
2026	三重県立川越高等学校	三重県三重郡	生徒が自分の「好き」とをことん追究! 学校から飛び出す川越版探究学習の展開	840名	200万円
2025	滋賀県立高島高等学校	滋賀県高島市	「インクルーシブ防災」から「地域の魅力発信」へ ～探究的な活動が高島市を動かす～	344名	200万円
2025	滋賀県立彦根東高等学校	滋賀県彦根市	Global Science の視点から持続可能な 社会を目指すイノベーション力の育成	640名	200万円
2026	滋賀県立守山北高等学校	滋賀県守山市	一人を想う心のエンジンを駆動する― 地域の担い手となる三方よし人材の育成	343名	200万円
2024	京都市立京都奏和高等学校	京都府京都市	Make smile ―心のエンジンをかけるための鍵となる「笑顔」の見つけ方―	240名	200万円
2024	京都市立京都堀川音楽高等学校	京都府京都市	「人とつながる音楽家」を目指して ～音楽科の特色を活かした探究的な学びの実践～	78名	100万円
2024	京都市立開建高等学校	京都府京都市	「やってみたいをやってみる」協創マインドの育成 ―地域・社会と協創する探究活動実践―	480名	120万円
2024	京都市立美術工芸高等学校	京都府京都市	「未来を切り拓く青年」育成教育プログラム ～多様性にふれ、豊かな想像力と発想力で未来を創出～	90名	100万円
2024	京都市立西京高等学校*1	京都府京都市	京都発!未来の教室がある学校をめざして ―グローバルリーダーシップの育成をめざしフィールドワークを 軸とした探究プログラムの構築―	560名	100万円
2025	京都市立堀川高等学校	京都府京都市	深みにハマる!探究活動の限界を超えろ!Deep DIVEプログラム	489名	200万円
2025	京都府立丹後緑風高等学校 網野学舎	京都府京丹後市	網野学舎式PBL「SteAM-INOVation」	217名	200万円

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2026	学校法人ヴィアートル学園 洛星中学校・高等学校	京都府京都市	Rakusei Forge:伝統教育と、産官学に加え保護者も巻き込んだ 重層的支援による「新しい社会貢献ビジョンの創造」プログラム	655名	180万円
2024	大阪府立桜和高等学校	大阪府大阪市	教育探究 学びのSTEAM化プロジェクト ～桜和から始まる、好きから始める、私たちの未来～	240名	200万円
2024	大阪府立箕面高等学校	大阪府箕面市	VUCA時代にグローバルに活躍する！ 箕面高校発、全員発揮型リーダーシップ教育。	720名	145万円
2024	大阪府立刀根山高等学校	大阪府豊中市	『トネ究』～深める探究・進める探究・広げる探究～	1,080名	150万円
2024	大阪府立 水都国際中学校・高等学校 ^{*1}	大阪府大阪市	世界も地域も私も変わる“Suito Action Project for SDGs”	720名	100万円
2025	大阪府立泉北高等学校	大阪府堺市	2つの専門学科の協働による地域連携 「次世代のリーダー育成“絆”プロジェクト」	864名	200万円
2025	大阪偕星学園高等学校	大阪府大阪市	一人ひとりの「おもしろい」を育む 対話と越境プログラム	824名	185万円
2024	兵庫県立須磨友が丘高等学校	兵庫県神戸市	地域のSafety Coreとしての学びを通して 自己のキャリアを育成するプログラム	720名	200万円
2024	兵庫県立長田高等学校 ^{*1}	兵庫県神戸市	一芸一才を活かして安全な未来都市づくりを担う アーバンクリエイター育成方策の開発	640名	100万円
2024	兵庫県立御影高等学校 ^{*1}	兵庫県神戸市	伸ばせ！「みかげ力」 ―外部連携を活かした生涯学び続ける生徒を育てる探究活動	947名	100万円
2025	東洋大学附属姫路高等学校	兵庫県姫路市	「わたし、まち、芽が出るミライ」略語：W.R.M「Watashi,Region,Mirai」 呼び名：ワーム、ワームに込めた意味は 「未来を耕す高校生」(ワームは土地を耕すミミズ)	308名	200万円
2025	兵庫県立阪神昆陽高等学校	兵庫県伊丹市	多様な人々が共に認め合う社会創りへの挑戦！ ～「ノーマライゼーション」の視点からの「ダイバーシティ」～	550名	200万円
2025	兵庫県立小野工業高等学校 全日制課程	兵庫県小野市	OTHELLO Project ～ものづくりのこころを育み、地域と共に成長する～	446名	200万円
2026	兵庫県立星陵高等学校	兵庫県神戸市	最上位目標「自考・自律」の実現に向けた、 生成AIとの対話とフィールドスタディを往還し 「問いを立てる力」を磨く3年間の一貫探究プログラム	828名	200万円
2025	奈良県立橿原高等学校	奈良県橿原市	橿高リベラルアーツ教育 ～自身と社会のwell-being向上のために～	949名	200万円
2025	奈良県立五條高等学校	奈良県五條市	～eco city 五條をめざして～ 地域コミュニティの絆と地域資源活用で深める環境と経済の教育	671名	200万円
2025	奈良市立一条高等学校	奈良県奈良市	社会に拓く“一条の探究” ～自ら思考し表現できるモノ・コトづくりの実践～	559名	200万円
2025	和歌山県立橋本高等学校	和歌山県橋本市	北極星を目指して ～Journey to the North Star ～	398名	200万円
2024	鳥取県立米子西高等学校	鳥取県米子市	「みらいチャレンジ」で未来をチェンジ！ ～社会とつながる探究活動で学びのイノベーション～	560名	200万円
2026	学校法人翔英学園 米子北高等学校	鳥取県米子市	ふるさと未来創造プロジェクト	459名	200万円
2026	鳥取県立境高等学校	鳥取県境港市	地域共創プログラム「境考学」 ～海に囲まれた境港から、普通科の新たな探究の潮流がはじまる～	499名	200万円
2024	島根県立益田高等学校	島根県益田市	益田圏域での理数教育を発展させるための 小学校・中学校・高等学校連携プログラム	1,200名	200万円
2024	島根県立隠岐高等学校	島根県隠岐郡	小さな島だからこそできる、最先端が混ざり合うキャリア探究 ―隠岐ジオパーク研究 × 実践型アントレプレナーシップ教育×越境的学び―	135名	200万円
2025	島根県立大田高等学校	島根県大田市	OHDAまるごと学びのフィールドプログラム	345名	200万円
2024	岡山県立岡山芳泉高等学校	岡山県岡山市	HOSENみらい「探究」プロジェクト	949名	50万円
2024	岡山県立岡山操山高等学校	岡山県岡山市	未来の岡山と世界のWell-beingの実現に貢献する グローバル・リーダーの育成	560名	200万円
2026	岡山県立総社高等学校	岡山県総社市	学校自主防災コンソーシアムSoja	712名	200万円

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2026	岡山県立邑久高等学校	岡山県瀬戸内市	TanQ活動セトリー～「探究心」育成プログラム～	236名	200万円
2024	広島県立広島皆実高等学校	広島県広島市	「広島皆実Zest探究コンソーシアム」を通した学校を越えた 新たな学びの創出 ～学校(Gakko)から楽広(Gakko)へ～	640名	200万円
2024	広島市立舟入高等学校 ^{*1}	広島県広島市	広島、日本、世界へ届け！ 舟入の「問い」！ ～「問い」から始まり、「問い」で終わる舟入の「問い」立て探究～	320名	70万円
2025	広島県立賀茂高等学校	広島県東広島市	Glocal Action Program(GAP)	737名	200万円
2025	広島県立大崎海星高等学校	広島県豊田郡	学びの島発 高校魅力化&島の仕事図鑑 キャリア教育の視点と教科横断的視点の融合による 教科横断的探究プログラム	44名	100万円
2025	広島大学附属福山高等学校	広島県福山市	「越境」探究学習プログラム～つながる・未来を考える～	603名	200万円
2026	広島県立広島高等学校	広島県東広島市	「卒業研究」を核とした知的な主体の育成 ～国際学術都市の資源を活用した「本物」との対話～	655名	200万円
2026	広島県立五日市高等学校	広島県広島市	AIに代替されない“気品・気力・体力”を兼ね備えた五高生 (チェンジメーカー)の育成 ―10年の伝統を持つ「地域防災」と 「最新デジタル技術」を融合させたグローバル探究の深化―	716名	200万円
2026	広島県立御調高等学校	広島県尾道市	「人や地域、社会と対話・協働し、自分を深掘りして尖った人材」を 目指す総合的な探究の時間	93名	100万円
2026	山口県立下関中等教育学校	山口県下関市	「探究×情報×グローバル」で拓く未来： アントレプレナーシップを育み、地域と世界をデジタルで繋ぎ 社会を動かす「海峡学」価値創造プロジェクト	196名	200万円
2025	徳島県立川島高等学校	徳島県吉野川市	Unlock Your Potential 一多様な視点で挑む、未来への羅針盤― 地域共創型課題解決探究による 生徒の自律と社会とのエンゲージメント強化	227名	200万円
2026	徳島市立高等学校	徳島県徳島市	IRP(「総合的な探究の時間」を本校では市高レインボープランと 呼んでいる)君たちの「正解」を社会へ ～産官学連携の進化～	610名	200万円
2026	徳島県立城南高等学校	徳島県徳島市	徳島・阿波の未利用資源を次世代の価値へ 普通科×応用数理科STEAM探究による地域社会実装プロジェクト	810名	200万円
2026	徳島県立徳島北高等学校	徳島県徳島市	AI 時代を見据えた「統計・データサイエンス活用型」地域共創による 地域・社会課題解決型探究学習	767名	200万円
2026	大手前丸亀中学・高等学校	香川県丸亀市	探究学習プログラム「LINKS」 ～教室の学びを統合し、実社会に価値を還元する生徒の育成～	184名	195万円
2025	愛媛県立伊予高等学校	愛媛県伊予郡	自らの力で、自らの未来を切り拓く生徒の育成 ～地域の人・モノ・コトを活用した探Qと 社会人基礎力を活用した振り返りを通して～	569名	200万円
2025	愛媛県立三崎高等学校	愛媛県西宇和郡	せんたんプロジェクト	153名	200万円
2024	高知県立安芸中学校・ 高等学校	高知県安芸市	次代の弥太郎育成プロジェクト ～地域課題と向き合いグローバルな視野を持ち 地域で活躍する人材の育成を目指す～	227名	200万円
2024	高知県立高知小津高等学校	高知県高知市	「イノベーション人材」育成プログラム ～地方から未来を創生～	800名	200万円
2024	高知県立山田高等学校 ^{*1}	高知県香美市	よってたかつて「山高」探究プログラム	300名	100万円
2026	高知県立室戸高等学校	高知県室戸市	ジオパーク資源を基盤とした学年接続型探究カリキュラムの構築 ～ユネスコスクールとして持続可能な 社会の担い手を育成する教育モデル～	87名	100万円
2026	高知県立高知丸の内高等学校	高知県高知市	夢の実現 ～地域と一体化した探究活動の充実～	464名	200万円
2025	福岡県立西田川高等学校	福岡県田川市	田川探究 ～地域をより魅力的にするために～	250名	200万円
2025	福岡県立八女高等学校	福岡県筑後市	「ちきゅうみらいプロジェクト」	708名	200万円
2026	福岡県立宗像高等学校	福岡県宗像市	「自分の好きで社会を幸せにする」探究活動	1,160名	200万円

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2026	福岡県立ありあけ新世高等学校	福岡県大牟田市	SHINSEI(新世・真正)の学びプロジェクト	434名	200万円
2025	佐賀県立伊万里高等学校	佐賀県伊万里市	なりたい自分へ自ら道を切り開く「自走する生徒」の育成プログラム ～行政・大学・地域の連携体制の構築～	281名	200万円
2024	長崎県立猶興館高等学校	長崎県平戸市	探究が平戸・日本の未来へつなぐ ～猶興精神(自立・自発)を心のエンジンに～	256名	200万円
2024	長崎県立小浜高等学校	長崎県雲仙市	島原半島の魅力再発見プロジェクト「本校での略称:しみプロ」 ～「小浜さん」定期発行へ～	37名	135.3万円
2024	長崎県立口加高等学校	長崎県南島原市	対面からつながるリモート探究 ～最南端から最先端～	160名	200万円
2025	長崎県立五島南高等学校	長崎県五島市	ふるさと3Rプラン+Realize ～地域貢献から広がる自己実現～	80名	100万円
2025	長崎県立西陵高等学校	長崎県諫早市	「進化する“西陵”で夢の実現」一校訓「自律」「進取」「友愛」のもと、 自ら主体的に、仲間と協働し、学びを深め、 将来に明るいビジョンを持って懸命に取り組む生徒の育成	711名	80万円
2026	長崎県立長崎北陽台高等学校	長崎県西彼杵郡	マルチリンガル・チャレンジ ～ことばを通して文化を知ろう～	237名	82万円
2026	長崎県立奈留高等学校	長崎県五島市	「E-アイランド・スクール×奈留実践」～小さな島の大きな挑戦～	26名	100万円
2024	熊本市立千原台高等学校	熊本県熊本市	フロンティアプロジェクト ～ソーシャルビジネスコンテストを 活用した未来のトップランナーの育成～	440名	200万円
2024	熊本県立小国高等学校	熊本県阿蘇郡	小国の未来をつくる!OGUNI-GOプロジェクト ～ふるさと納税返礼品を活用した地域貢献型カタログギフト～	37名	150万円
2024	熊本県立熊本高等学校*1	熊本県熊本市	共創とイノベーションの融合:STEAM教育エコシステム ～私の探究から、私達の探究へ～	1,200名	100万円
2026	熊本県立岱志高等学校	熊本県荒尾市	「暮らしたいまち日本一」に向けた探究実践× コースの特色ある学びの充実～社会人基礎力を身に付け、 進路と結びつけて自分を語れる生徒の育成～	130名	200万円
2026	熊本県立阿蘇中央高等学校	熊本県阿蘇市	地域を題材にした探究的学びをとおして、 生徒自身の生涯にわたる探究力の礎を育む	48名	82万円
2024	大分県立安心院高等学校	大分県宇佐市	小中高一貫教育を活かした 安心院高校グローバルマインド育成プログラム	185名	200万円
2024	大分県立久住高原 農業高等学校	大分県竹田市	次代の農業を担う“進”農業人育成プログラム ～創る力、繋がる力、拓く力の習得・向上を目指した探究学習の推進～	87名	100万円
2023	宮崎県立宮崎大宮高等学校*2	宮崎県宮崎市	「大地に絵をかく」イノベーターを育成する教育プログラムの研究開発 ～多様な人びと協創するグローバル・イノベーター～	1,080名	200万円
2025	宮崎県立高鍋高等学校	宮崎県児湯郡	高鍋高校の探究学習発展を目的とした インド工科大学との共創プログラム	566名	200万円
2025	宮崎県立日南高等学校	宮崎県日南市	未来戦略課・Nichinan Project 2.0	224名	200万円
2026	宮崎県立飯野高等学校	宮崎県えびの市	インターローカル・スクール飯野 ―地域と世界を往還する高校生探究家の育成―	221名	200万円
2025	鹿児島県立大島高等学校	鹿児島県奄美市	地域づくりフィールドワーク	240名	100万円
2026	鹿児島県立甲南高等学校	鹿児島県鹿児島市	KQプログラム ―心のエンジンを駆動し科学とデータで地域を創生する甲南クエスト	953名	200万円
2026	鹿児島純心女子高等学校	鹿児島県鹿児島市	「好き」と「現実」の「ズレ」を希望へ変える SRTT(地域シンクタンク)構想による「エシカル・リーダー」育成	165名	200万円
2026	鹿児島県立串木野高等学校	鹿児島県 いちき串木野市	「串木野学」探究プロジェクト2.0 ～探究活動の「自走」を目指して～	127名	161.9万円
2026	鹿児島県立種子島中央高等学校	鹿児島県熊毛郡	観光×防災×DXによる離島減災モデルプログラム	193名	200万円
2026	鹿児島県立大島北高等学校	鹿児島県奄美市	北高 new energy ～「熱の循環」による駆動型探究プログラム～	142名	200万円
2024	沖縄県立開邦高等学校	沖縄県島尻郡	開 邦 雄 飛 ― 自ら育ち、自走する集団の育成プログラム―	480名	200万円

*1 リエントリー …グッドプラクティスの普及・横展開を目的に、3年間の助成終了となったプログラムの一部をリエントリー採択として新たな助成を行うもの。 カテゴリー1助成額計3億908.6万円

*2 個別事情により、休止後再開。

カテゴリー2

組織名五十音順					
採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2026	朝日大学	岐阜県瑞穂市	高大連携による地域を担う観光人材育成事業	250名	1,000万円
2025	株式会社イツノマ	宮崎県児湯郡	自分たちのまちは、自分たちで創る まちづくり×起業家教育×映像発信	100名	948万円
2025	一般社団法人InnoDrops	佐賀県唐津市	みらいの起業家と一緒にイノベーションを起こす (1)STEAMDAYS!!(2)SAND lab	170名	985.2万円
2025	NPO法人MIS	東京都文京区	Japan-ASEAN Youth Summit 2026	100名	1,000万円
2025	一般社団法人AWESOME	兵庫県神戸市	AWESOME Challenge ～理系の世界で未来を描く探究プログラム～	80名	535.7万円
2025	学校法人沖縄科学技術大学院 大学学園	沖縄県国頭郡	昆虫バイオサンプリング研究 ～高校生×昆虫データベース研究プロジェクト、 データでつなぐ沖縄の未来～	50名	791.8万円
2026	有限会社おきなわ教育ラボ	沖縄県浦添市	未来職業設計プログラム -次世代の仕事を構想・検証する高校生育成モデル-	20名	463万円
2026	学校法人金沢工業大学 (金沢工業大学 Beyond SDGs推進センター)	石川県野々市市	生成AIを使いこなす「新しい学習文化」の醸成 -生徒自身が主体的にAIとの境界線を設定できる力を 育むAI Tinkery導入プロジェクト-	1,090名	986.4万円
2024	一般社団法人 Girls Unlimited Program	東京都板橋区	Girls Unlimited Program: 体験格差を解消するエンパワメントプログラム	300名	370万円
2026	キュリー株式会社	東京都文京区	RE:ACTION FIRE ～あなたの「どうして?」「やってみたい!」の好奇心をエンタメ、 アートと組み合わせる社会を変える実践型プログラム～	100名	955万円
2024	株式会社教育と探求社	東京都千代田区	“私の願い”を呼び起こし、探究を駆動させる「CORE」	800名	900万円
2026	貴凜庁株式会社	宮城県東松島市	学校外のリアルな「未来都市」で生きる力(レジリエンス)を取り戻す! 『スマートエコビレッジ開拓者育成プログラム』 ～独自の地域ポイントを活用した自立と共創のハイブリッド体験～	30名	1,000万円
2026	株式会社Kumanomics	東京都世田谷区	問いから始める高校生デザイン共創ラボ ―世界を見た先輩と、地域企業と、デザインアプローチで 未来設計に挑戦する―	75名	500万円
2024	一般社団法人KURUMIRAI	熊本県菊池郡	『高校生が作るギフト』	900名	500万円
2024	KCJ GROUP 株式会社	東京都中央区	「Future Life Design Lab」 キッズニアとアントレプレナーシップ教育の専門家が創る キャリア教育プログラム	100名	888万円
2026	株式会社コエルワ	北海道札幌市	―皿アントレ ～農業高校生が稼ぐ力をつけて、地域の食産業を自ら動かす3ヶ月～	30名	695.8万円
2025	一般社団法人 国際STEM学習協会	神奈川県鎌倉市	FABRICA! ファブリカ 中高生の居場所× 次世代ファッションテックで、新たな自分を発見する!	100名	880万円
2026	一般社団法人KOKO	長野県松本市	「このまちで未来は創れる」と思える学びをつくる まちごと探究カリキュラム「baton」	1,000名	500万円
2024	一般社団法人52Hz	京都府京都市	中高生が自分らしくグローバルに輝くために 探究活動を加速させる伴走プログラム【52Hz Accelerator】	500名	566.6万円
2026	一般社団法人資源再読機構	北海道広尾郡	みんなでつくる鹿教育研究プログラムと鹿の知識体系	55名	900万円
2025	認定NPO法人 全国子ども食堂 支援センター・むすびえ	東京都渋谷区	こども食堂・学校架け橋プロジェクト 「こども食堂を通じた地域探究学習」プログラム	160名	568万円
2024	特定非営利活動法人 育て上げネット*	東京都立川市	若者の孤立無業化予防のためのキャリア教育プログラム Life Connection	4,500名	424.5万円
2024	特定非営利活動法人 Touch the Future	東京都調布市	(1)Touch the Future高校生向け医療体験学習 (2)DoctorX!ハイブリッド・ミーティング	230名	606万円
2024	株式会社トモノカイ	東京都渋谷区	自由すぎる研究EXPOと連動した、 国際映画祭接続型、映像ドキュメンタリー制作プログラム	500名	500万円

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2025	株式会社BYD	東京都台東区	「ふるさと」を起点にした 価値創造型アントレプレナーシッププログラム	100名	700万円
2025	北海道松前郡福島町 教育委員会	北海道松前郡	高校生が創る!地球の未来と新しい学び 環境と教育問題を変えたい仲間大集合! みんなの想いをカタチにしよう。	16名	157万円
2024	一般社団法人病院 マーケティングサミットJAPAN	東京都新宿区	ワカモノ未来共創部 ～自分たちのアイデアで病院や暮らしの現場を変えてみよう!～	100名	890万円
2024	一般社団法人未来キッズ コンテンツ総合研究所*	東京都港区	全国高校AIアスリート選手権大会 シンギュラリティ・バトルクエスト(特別支援学校強化プログラム)	50名	400万円
2024	NPO法人Leapfor	東京都港区	越境型部活動“体感”&“創設”支援プログラム	200名	1,000万円
2024	特定非営利活動法人Waffle	東京都渋谷区	Waffle Campホームタウン ～日本全国で女子中高生の理系経験の格差を解消する～	200名	881.9万円

* リエントリー …グッドプラクティスの普及・横展開を目的に、3年間の助成終了となったプログラムの一部をリエントリー採択として新たな助成を行うもの。 カテゴリー2助成額計 2億1,492.9万円

カテゴリー3

組織名五十音順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2024	学校法人麻布獣医学園 麻布大学	神奈川県相模原市	麻布「出る杭を引き伸ばす」プログラム	150名	500万円
2024	特定非営利活動法人 教育の環	東京都目黒区	世界への挑戦を継承し、若者たちの挑戦の連鎖を生む グローバルイノベーター育成プログラム「Global Innovators Nexus」 (グローバル イノベーターズ ネクサス)	100名	300万円
2025	国立大学法人神戸大学	兵庫県神戸市	科学技術みらい開拓人材育成プログラム: Nurturing Future Innovators	40名	700万円
2026	一般社団法人 国際人工知能 オリンピック日本委員会	東京都中央区	AIオリンピックを核とした中高生AI先端人材発掘・育成エコシステム	50名	300万円
2026	静岡大学	静岡県静岡市	未来の科学者養成スクール (Future Scientists' School)	40名	1,000万円
2026	株式会社SPACE	東京都世田谷区	卓越した芸術・クラフト系の「個才」を世界で輝かせる God Handsプロジェクト	40名	700万円
2024	国立大学法人 東京科学大学	東京都目黒区	女子STEAM生徒の未来チャレンジ 「みらいの扉キャンプ・みらいの扉ビジット」	2,550名	1,500万円
2025	国立大学法人 東京大学 生産技術研究所	東京都目黒区	デザインで未来をつくる: 高校生のためのデザイン先端イノベーション教育プログラム	40名	1,000万円
2024	東北大学*	宮城県仙台市	東北から世界へ みらい型「科学者の卵養成講座」 ～集え、異能な高校生よ。創れ、未来の理想社会を～	100名	985万円
2024	独立行政法人 国立高等専門学校機構 長岡工業高等専門学校	新潟県長岡市	地域DXエバンジェリスト創出プログラム ～高専生がデザインする地域未来～	50名	1,180.6万円
2025	東海国立大学機構 名古屋大学 学術研究・産学官連携推進本部 イノベーション・ アントレプレナーシップ推進室	愛知県名古屋市	未来のインパクト創出に挑戦する社会的起業家の卵 「インパクト・アントレプレナー」発掘・育成プロジェクト	300名	498.5万円
2024	一般社団法人 日本スローフード協会	東京都中央区	次代の食料生産を担う“ガストロノーム”発掘・育成	35名	400万円
2026	公益社団法人 物理オリンピック日本委員会	東京都新宿区	女子高校生のための「目指せ！物理オリンピック・物理チャレンジ」講座	40名	636.7万円
2025	武蔵野美術大学	東京都新宿区	Project Tangible ～デザインのチカラで高校生の探究活動を次のステージへ～	50名	1,000万円

* リエントリー …グッドプラクティスの普及・横展開を目的に、3年間の助成終了となったプログラムの一部をリエントリー採択として新たな助成を行うもの。 カテゴリー3 助成額計1億700.8万円

カテゴリー4

組織名五十音順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2024	愛知県公立大学法人 愛知県立大学*	愛知県長久手市	愛県大教養教育新カリキュラム:「県大世界あいち学」 ―地域・高大連携強化へ―	760名	309.2万円
2024	大阪大学*	大阪府吹田市	「対話」で開く「学問への扉」 ～少人数セミナー型初年次導入科目の挑戦～	3,400名	400万円
2026	岡山大学 教育推進機構	岡山県岡山市	混ざること学びは変わる～「知の探研」という挑戦～	2,400名	500万円
2025	岡山大学教育推進機構 外国語教育部門	岡山県岡山市	多読と対話による学びのコモン創出プログラム ～図書館を拠点に学生と地域が共に学び、未来を拓く～	160名	159.8万円
2026	学校法人 金沢工業大学	石川県野々市市	キャンパスを拡張する複数博物館の往還と プロジェクト型学習の融合:総合知を共創・実践する次世代型PBL 『Project Based Liberal-arts』の開発	60名	127.1万円
2026	京都光華大学	京都府京都市	仏教精神に基づくSEL教養教育プログラム-利他の心の醸成-	536名	247万円
2026	京都大学 成長戦略本部	京都府京都市	土が教養になるとき ―身体知を通じた地域文化の継承と社会課題探究プログラム―	24名	100万円
2024	公立大学法人熊本県立大学	熊本県熊本市	もやいすと育成システムによる地域性と国際性を併せ持つ 地域づくりのキーパーソン「もやいすと」の養成	535名	250万円
2024	一般財団法人熊本市 国際交流振興事業団	熊本県熊本市	多文化共創ボランティア・ラーニング ～グローバル・シチズンシップを持てる人材の育成支援～	170名	273万円
2025	国際基督教大学	東京都三鷹市	想定を超える世界にどう応えるのか:「現代×リベラルアーツ」 ―現代の諸課題に立ち向かうための新たな 実践型リベラルアーツ教育プログラムの創生―	400名	340万円
2025	駒澤大学	東京都世田谷区	Join 禅プログラム～禅のこころでつなぐ世界と地域～	100名	236.8万円
2024	公立大学法人埼玉県立大学	埼玉県越谷市	多層的・分野横断的な批判的対話実践プログラム -教員・SA・学生の協働で知を織り上げる-	300名	135.9万円
2026	国立大学法人 佐賀大学	佐賀県佐賀市	志共創(しきょうそう)アカデミー ～次世代社会デザイン人材育成プログラム～	40名	100万円
2024	滋賀大学	滋賀県彦根市	「未来創生リベラルアーツプログラム」 ～学生とともにデザインする 「リベラルアーツ×データサイエンス」教育～	790名	400万円
2026	国立大学法人 島根大学 教育・学生支援本部 大学教育センター	島根県松江市	「学びのタネ」育成サイクルプログラム ―探究と対話のデザイン―	100名	300万円
2024	順天堂大学	東京都文京区	レッツMEdit Q!「医学をみんなでゲームする」 ―シリアスゲーム開発で社会と医療を変える 21世紀型STEAM教育カリキュラム―	200名	150万円
2024	昭和医科大学 ストレスマネジメント研究所	東京都品川区	課題解決できる医師を育成するための教養教育プログラム: 新しい「行動医学」教育	240名	240万円
2025	国立大学法人千葉大学 国際未来教育基幹 高等教育センター	千葉県千葉市	予測不可能な時代の環境課題解決人材育成プログラム ～学生主体の環境マネジメントシステムと 全学副専攻プログラムを活用した実践型教育の推進～	400名	300万円
2025	国立大学法人筑波大学	茨城県つくば市	研究学園都市全体で構築する人材育成・交流モデルの提案 ～つくば型チュートリアル学修の実装による知の連鎖と循環～	60名	100万円
2024	国立大学法人東京科学大学 リベラルアーツ研究教育院	東京都目黒区	「志」を育む東京工業大学(東京科学大学) リベラルアーツ教育プログラムの発展 ―専門性をもった文理共創人材の育成を目指して―	2,715名	400万円
2026	東京家政大学	東京都板橋区	Fab Liberal Arts for Everyday Life ― 食べる・着る・学ぶ・遊ぶ・暮らすを再設計する 領域横断型教養教育 ―	400名	318万円
2024	東北大学*	宮城県仙台市	挑創カレッジと学問論でつむぐ 分野横断型リベラルアーツプログラム	2,400名	358.9万円
2024	東北大学 研究推進・支援機構 知の創出センター	宮城県仙台市	東北大学知のフォーラム「未来社会デザイン塾」 ―人が集い・共に学び・創造する―	200名	150万円

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2025	徳島文理大学 人間生活学部児童学科	徳島県徳島市	「人間力」の育成：子どもの学び支援実習における 社会性と情動の学習（SEL）	80名	200万円
2026	国立大学法人 富山大学教養教育院	富山県富山市	価値対立を扱うロールプレイ型体験学習による 多文化共生リテラシー教育	400名	400万円
2024	豊橋技術科学大学総合教育院	愛知県豊橋市	異分野対話型リベラルアーツ教育の構築 ～知的創造の場の創出と体験～	440名	34.2万円
2025	公立大学法人 長野大学	長野県上田市	障害当事者と学生・教員・行政・地域が協働して創る主権者教育 （「私のみらい選択」）を通じて、DEI（多様性、公平性、包摂性）社会の 実現を目指す未来志向型プログラム ～「問いと選択」「弱さへのまなざしと共感」プログラム～	50名	129万円
2024	名古屋経済大学	愛知県犬山市	中部地方内陸地域の地域創生を担う人材を育成する 実践的教養教育プログラム ～学部を横断する課題志向のサブスペシャリティ！～	500名	300万円
2025	奈良国立大学機構奈良 カレッジズ連携推進センター	奈良県奈良市	万葉集を起点とした地域振興×教育の融合による 対話型協働学習プログラム ―自省・傾聴・共創が紡ぐ学びのイノベーション―	350名	250万円
2024	国立大学法人 新潟大学*	新潟県新潟市	新潟大学ダブルホーム―地域と創る新たなふるさと―	360名	150万円
2025	法政大学	東京都千代田区	温暖化から地球の明日を守る人材を育成する 正課・正課外教育融合プログラム ～C-NEXTプログラム～ （Carbon-Neutral Education Transformation for Tomorrow）	100名	170万円
2024	北海道科学大学	北海道札幌市	北海道科学大学・課題解決力育成プログラム ―デジタル社会の総合知と異分野協働に基づく地域課題への挑戦―	1,984名	305万円
2024	武蔵野大学教育学部	東京都江東区	幼児教育プロジェクト：学生・教員・子ども・地域が協働して 幼児教育・保育の視点から社会を変革する教育プログラム	50名	50万円
2025	山形大学	山形県山形市	地域の課題と魅力を山形から考える ―地域創生を目指した持続可能な教養教育―	1,663名	505万円
2026	国立大学法人 山口大学	山口県山口市	3大学をつなぐ連携開設科目における 「AI/ロボティックスを導入した次世代型グループワーク」の開発	200名	400.8万円
2024	国立大学法人山梨大学	山梨県甲府市	実践！ 風林火山：VUCA時代に生きる学生のための 教養教育「シン・ナンダイ」	850名	398.1万円

* リエントリー … グッドプラクティスの普及・横展開を目的に、3年間の助成終了となったプログラムの一部をリエントリー採択として新たな助成を行うもの。 カテゴリー4助成額計 9,187.8万円

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2024	一般社団法人ティーチャーズ・ イニシアティブ*	東京都千代田区	「主体的・協働的な学び」を実践できる 教員養成のための指導主事研修プログラム	20名	484万円
2024	国立大学法人 東京学芸大学*	東京都小金井市	探究的な学びの実践コミュニティ拡大支援プログラムの開発	1,200名	1,000万円
2025	東京大学大学院 教育学研究科附属学校教育 高度化・効果検証センター	東京都文京区	高等学校において生徒の個人研究型探究学習を指導する 教員の育成開発	50名	865万円
2026	兵庫教育大学	兵庫県加東市	AIネイティブ時代の「自ら考え判断し行動する力」を育む 探究指導力向上プログラム	630名	749.9万円
2026	一般社団法人Fora	東京都中央区	プロデューサー教員養成プログラム 「SCOPE（Sustainable COoperation Program for Educators）」 ―探究を持続させる外部連携力の育成	20名	774万円
2024	一般社団法人 Bridge for Fukushima	福島県福島市	「ケースメソッド」を用いた主体的・協働的な学習を 実践できる教員・指導者育成プログラム	200名	665.9万円
2024	株式会社ミエタ	東京都港区	実社会に存在する問いの解決に挑戦する『社会行動』型教科学習の 授業計画を担う探究コーディネーター育成およびコミュニティ創出	90名	820万円

* リエントリー … グッドプラクティスの普及・横展開を目的に、3年間の助成終了となったプログラムの一部をリエントリー採択として新たな助成を行うもの。 カテゴリー5助成額計 1億665.3万円

カテゴリー5

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	採択時 対象者数	助成額
2025	Institution for a Global Society株式会社	東京都渋谷区	先生自身が楽しむ！探究型学習実践プログラム	200名	672.4万円
2025	桜美林大学	東京都町田市	越境する教育パートナーシップを育成する 認定型研修プログラム「Bridge」	40名	801万円
2024	認定特定非営利活動法人 カタリバ	東京都杉並区	高校生に意欲と創造性を届けるための「伴走力向上」と 「校内推進体制づくり」を目指した伴走型研修	30名	680万円
2026	株式会社教育と探求社	東京都千代田区	心のエンジンを駆動させる「データドリブン型 探究教員」養成事業	60名	853.4万円
2025	一般社団法人 共感結社モルタル	長崎県佐世保市	教員・地域伴走者版 地域探究体感・実践プログラム	30名	684万円
2026	国立大学法人高知大学 地域・世界つながり推進機構	高知県高知市	高知の未来を変えるPBL指導者および教員養成プログラム ～地域課題×DX×先生一人ひとりの個性で心を動かす学びを実現	170名	765.7万円
2024	株式会社3in	山口県長門市	先生による探究学習・起業家教育体験プログラム	100名	850万円

貸借対照表

2026年3月31日現在

(単位：千円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 資産の部			
1.流動資産			
現金預金	272,463	475,277	▲202,814
未収金、前払金、前払費用等	53,281	38,680	14,600
流動資産合計	325,744	513,958	▲188,214
2.固定資産			
その他固定資産	8,280	9,681	▲1,401
固定資産合計	8,280	9,681	▲1,401
資産合計	334,024	523,638	▲189,615
II 負債の部			
流動負債（未払金、未払費用等）	15,813	17,879	▲2,066
負債合計	15,813	17,879	▲2,066
III 正味財産の部			
1.指定正味財産	0	0	0
2.一般正味財産	318,211	505,759	▲187,549
正味財産合計	318,211	505,759	▲187,549
負債及び正味財産合計	334,024	523,638	▲189,615

正味財産増減計算書

2025年4月1日から2026年3月31日まで

(単位：千円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 一般正味財産増減の部			
1.経常増減の部			
(1)経常収益			
受取寄付金	1,010,000	1,010,000	0
その他経常収益	2,321	695	1,626
経常収益計	1,012,321	1,010,695	1,626
(2)経常費用			
事業費	1,174,462	1,168,317	6,145
支払助成金	867,901	920,591	▲52,689
人件費	23,334	23,233	101
その他事業費	283,226	224,493	58,734
管理費	25,407	25,052	355
人件費	12,558	12,506	52
その他管理費	12,849	12,547	303
経常費用計	1,199,869	1,193,369	6,500
2.経常外増減の部			
(1)経常外収益計	0	4,688	▲4,688
(2)経常外費用計	0	0	0
当期一般正味財産増減額	▲187,549	▲177,986	▲9,563
一般正味財産期首残高	505,759	683,745	▲177,986
一般正味財産期末残高	318,211	505,759	▲187,549
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
III 正味財産期末残高	318,211	505,759	▲187,549

評議員・役員

評議員

小野 直樹
(三菱マテリアル株式会社 特別顧問)

清家 篤
(日本赤十字社 社長)

高岡 英則
(三菱金曜会 事務局長)

高橋 裕子
(津田塾大学 学長)

田中 愛治
(早稲田大学 総長)

長澤 仁志
(日本郵船株式会社 取締役会長)

長島 巖
(三菱UFJ信託銀行株式会社 取締役会長)

永田 恭介
(筑波大学 学長)

理事長

宮永 俊一
(三菱重工株式会社 名誉顧問)

常務理事

妹背 正雄

理事

上田 泰史
(明治安田生命保険相互会社 執行役専務 グループ・チーフ・アクチュアリー CFO)

小西 聖子
(武蔵野大学 学長)

笹 のぶえ
(大妻女子大学 特任教授)

七條 博明
(公益財団法人 三菱財団 常務理事)

鈴木 寛
(東京大学 教授、慶應義塾大学 特任教授)

野島 嘉之
(三菱商事株式会社 代表取締役 常務執行役員)

濱 利仁
(麒麟ホールディングス株式会社 常務執行役員)

監事

三宅 茂久
(税理士法人 山田&パートナーズ 統括代表社員)

アドバイザリーボード委員

鵜尾 雅隆
(特定非営利活動法人 日本ファンドレイジング協会 会長)

立木 貴文
(長崎大学 未来教育創造センター 教授)

西村 圭一
(東京学芸大学 大学院教育学研究科 教授・学長補佐
兼 先端教育人材育成推進機構 副機構長)

藤村 武宏
(三菱商事株式会社 執行役員 総務部長)

古沢 由紀子
(読売新聞東京本社 編集委員)

松尾 豊
(東京大学大学院 工学系研究科 技術経営戦略学専攻 教授)

横山 広美
(東京大学 国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構・学際情報学府 教授)

吉田 文
(早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授)

※2026年6月30日現在(五十音順・敬称略)

組織概要

所在地
東京都千代田区丸の内二丁目2番3号
丸の内仲通りビル9階

設立日
2019年10月1日

事業内容
教育プログラムや教育事業者への助成、事業活動のサポート

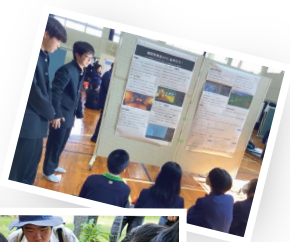
事業期間
2019年10月1日～2031年3月31日まで(予定)

総事業費
約100億円

お問い合わせ先
info@mmfe.or.jp

発行：2026年9月
制作協力／株式会社エム・シー・コミュニケーションズ
デザイン／株式会社弾デザイン事務所

一般財団法人
三菱みらい育成財団
Mitsubishi Memorial Foundation for Educational Excellence



一般財団法人

三菱みらい育成財団

www.mmfe.or.jp

〒100-0005 東京都千代田区丸の内二丁目2番3号
TEL:03-6206-3435

